

## 2 Schemes

### 2.6 Divisors

#### 2.6.1

Scheme  $X$  が条件  $(*)$ 、すなわち noetherian integral separated scheme で、codim 1 の  $\mathcal{O}_x$  が regular であるとする。このとき  $X \times \mathbf{P}^n$  も  $(*)$  を満たすことを示す。

(Noetherian)  $X$  は有限個の  $U_i = \text{Spec } A_i$ ,  $A_i$ : noetherian ring でカバーでき (Def. p.83)、 $\mathbf{P}^n$  は  $D_+(x_j) = \text{Spec } \mathbb{Z}[x_0, \dots, x_n]_{(x_j)}$ ,  $j = 0, \dots, n$  でカバーされるので、 $X \times \mathbf{P}^n$  は  $\text{Spec } A_i[x_0/x_j, \dots, x_n/x_j]$  でカバーできる。

$A_i$  は noetherian ゆえ  $A_i[x_0/x_j, \dots, x_n/x_j]$  も noetherian であり ([1], Corollary 7.6)、従って  $X \times \mathbf{P}^n$  は noetherian となる。

(Integral)  $X$ ,  $\mathbf{P}^n$  の open affine covering を  $U_i = \text{Spec } A_i$ ,  $D_+(x_j)$  とすると

$$U_i \times D_+(x_j) = \text{Spec } A_i[x_0/x_j, \dots, x_n/x_j]$$

は integral なので、次の性質 1 より、 $X \times \mathbf{P}^n$  は integral である。

(Separated)  $X$ ,  $\mathbf{P}^n$  は separated なので (Spec  $\mathbb{Z}$  上)、 $X \times_{\mathbb{Z}} \mathbf{P}^n$  も separated である (Corollary 4.6, (d))。

(Regular in codimension 1) これは local な性質なので、 $X \times \mathbf{P}^n$  をカバーする開集合  $X \times \mathbf{A}^n$  がそれを満たせばよい。Fiber product は結合律を満たし (解答 Exercise II.4.4 の性質 3 に示した)、 $\mathbf{A}^n = \mathbf{A}^{n-1} \times \mathbf{A}^1$  なので<sup>1</sup> Proposition 6.6 を用いれば、数学的帰納法より成立する。

次に  $\text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n) \cong \text{Cl}(X) \times \mathbb{Z}$  を証明する。

まず、 $q : X \times \mathbf{P}^n \rightarrow \mathbf{P}^n$  を projection morphism とすると、 $\eta_0 = (x_0)$  に対し、 $Z := q^{-1}(\{\eta_0\}^-) = X \times \{\eta_0\}^-$  は既約であり、codimension が 1 であることを示す<sup>2</sup>。

$$\begin{aligned} \{\eta_0\}^- &= V((x_0)) = \text{Proj } \mathbb{Z}[x_0, \dots, x_n]/(x_0) = \text{Proj } \mathbb{Z}[x_1, \dots, x_n] \\ &= \bigcup_j D_+^0(x_j), \quad D_+^0(x_j) := \text{Spec } \mathbb{Z}[x_1/x_j, \dots, x_n/x_j] \end{aligned}$$

より

$$X \times \{\eta_0\}^- = \bigcup_j (X \times D_+^0(x_j)) \quad (1)$$

であるが、 $X$  の open covering を  $U_i = \text{Spec } A_i$  とすると、

$$U_i \times D_+^0(x_j) = \text{Spec } A_i[x_1/x_j, \dots, x_n/x_j]$$

<sup>1</sup>一方  $\mathbf{P}^n = \mathbf{P}^{n-1} \times \mathbf{P}^1$  とは限らない。Exercise II.5.11

<sup>2</sup>p.88 では inverse image  $p_1^{-1}(U) = U \times Y$  を示すときに  $U$  を open としているが、証明を追えば分かるように、 $U$  は closed subscheme でも成立する。あるいは、The Stacks project, Definition 26.17.7 より、 $f : X \rightarrow Y$  のとき、 $Z \subseteq Y$  に対し  $f^{-1}(Z) = Z \times_Y X$  なので、 $p^{-1}(Z) = Z \times_X (X \times_S Y) = Z \times_S Y$ 。

は integral なので、性質 1 から  $Z = X \times \{\eta_0\}^-$  は既約となる。

$X \times \mathbf{P}^n$  の非空な open として  $\text{Spec } A_i[x_0/x_j, \dots, x_n/x_j]$  が取れるので、 $\dim(X \times \mathbf{P}^n) = \dim X + n$  である。一方、 $Z = q^{-1}(\{\eta_0\}^-) = X \times \{\eta_0\}^-$  の非空な open として  $U_i \times D_+^0(x_j) = \text{Spec } A_i[x_1/x_j, \dots, x_n/x_j]$  が取れるので (式 (1))、 $\dim Z = \dim X + n - 1$  であり、 $\text{codim } Z = 1$  となる。

Proposition 6.5(c) から  $\mathbb{Z} \rightarrow \text{Cl } X \times \mathbf{P}^n \rightarrow \text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n - Z) \rightarrow 0$  が成立するが、 $X \times \mathbf{P}^n - Z = q^{-1}(V((x_0))^c) = X \times D_+(x_0) = X \times \mathbf{A}^n$  であり、Proposition 6.6 を用いれば  $\text{Cl}(X \times \mathbf{A}^n) = \text{Cl } X$  となるので

$$\mathbb{Z} \xrightarrow{i} \text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n) \xrightarrow{\varphi} \text{Cl } X \rightarrow 0$$

を得る。

ここで、 $i: \mathbb{Z} \rightarrow \text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n)$  が単射であることを示す。

$D = dZ = (f)$ ,  $f \in K(X \times \mathbf{P}^n)$ 、すなわち  $v_Z(f) = d \neq 0$ ,  $v_Y(f) = 0$ ,  $\forall Y \neq Z$  と仮定する。

$X$  が既約なので  $\mathcal{K}$  は constant sheaf、ゆえに  $\mathcal{K}(U) = K = K(X)$  で

$$K(X \times \mathbf{P}^n) = \text{Frac}(A_i[x_0/x_j, \dots, x_n/x_j]) = K[x_0, \dots, x_n]_{((0))}$$

であり、これは  $K(x_0, \dots, x_n)$  において、0 次の斉次有理式からなる部分集合に等しい。従って、 $f = (x_0^r g)/h$ ,  $x_0 \nmid g, h$ ,  $\gcd(g, h) = 1$ ,  $r + \deg g = \deg h$  とかける。ここで、 $\deg$  は  $x_0, \dots, x_n$  に関するものである。

$Z = \{\eta\}^- \subseteq X \times \mathbf{P}^n$  とすると、ある  $i, j$  に対し  $\eta \in U := U_i \times D_+(x_j) = \text{Spec } A_i[x_0, \dots, x_n]_{(x_j)}$ ,  $U_i = \text{Spec } A_i \subseteq X$  であり、 $S = A_i[x_0, \dots, x_n]$  とすると  $S_{(x_j)}$  において、 $\eta = \mathfrak{p}_{(x_j)} = (x_0)_{(x_j)}$  (ゆえ  $\mathfrak{p}$  は  $S$  の prime ideal)

$$\mathcal{O}_{X \times \mathbf{P}^n, \eta} = \mathcal{O}_{U, \eta} = (S_{(x_j)})_{\mathfrak{p}_{(x_j)}} = S_{(\mathfrak{p})}$$

となる。

その max ideal は  $\mathfrak{m} = \mathfrak{p}_{(\mathfrak{p})} = (x_0)_{((x_0))}$  なので、 $f = (x_0^r g)/h$  より  $v_{Z \cap U}(f) = r$  である。既に述べたように  $v_Z(f) = v_{Z \cap U}(f)$  から、 $r = d$ 、すなわち

$$f = (x_0^d g)/h, x_0 \nmid g, h, \gcd(g, h) = 1, d + \deg g = \deg h$$

を得る。 $d \neq 0$  ゆえ、 $g, h$  のいずれかは既約成分を持ち、対応する prime divisor を  $Y$  とすると、 $v_Y(f) \neq 0$  となって、仮定に反する。よって、 $i$  は単射であり、完全系列

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{i} \text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n) \xrightarrow{\varphi} \text{Cl } X \rightarrow 0 \quad (2)$$

が得られる。

次に、この完全系列 (2) が分裂していることを示す。 $U := X \times \mathbf{P}^n - Z = X \times \mathbf{A}^n$  とおくと

$$\varphi: \text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n) \rightarrow \text{Cl } U, V \mapsto V \cap U$$

ここで、 $Y$  を  $X$  の prime divisor とすると、既に述べたように  $Y \times \mathbf{P}^n$  は  $X \times \mathbf{P}^n$  の prime divisor となり、性質 2 から

$$Y \times \mathbf{P}^n \mapsto (Y \times \mathbf{P}^n) \cap (X \times \mathbf{A}^n) = Y \times \mathbf{A}^n$$

$\text{Cl}(X \times \mathbf{A}^n) \approx \text{Cl} X$  の対応により  $Y$  が  $Y \times \mathbf{A}^n$  に対応しているので、

$$\varphi : Y \times \mathbf{P}^n \mapsto Y$$

ここで、

$$\delta : \text{Cl} X \rightarrow \text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n), Y \rightarrow Y \times \mathbf{P}^n$$

とおくと、 $\varphi\delta = \text{id}_{\text{Cl} X}$  なので、完全系列 (2) は分裂している。

以上により、 $\text{Cl}(X \times \mathbf{P}^n) = \text{Cl} X \times \mathbb{Z}$  が成立する。

**性質 1.** 既約 scheme  $X, Y$  の open affine covering を  $U_i = \text{Spec } A_i, V_j = \text{Spec } B_j$  とするとき、nilradical  $\mathfrak{N}(A_i \otimes B_j)$  が prime ideal ならば  $X \times Y$  は既約である。さらに  $A_i \otimes B_j$  が整域ならば  $X \times Y$  は integral である。

(証明) (i)  $X$  が affine scheme の場合  
 $X = \text{Spec } A, \mathfrak{N}(A \otimes B_j)$  が prime ideal とする。

$$X \times Y = X \times \bigcup_j V_j = \bigcup_j (X \times V_j) = \bigcup_j \text{Spec}(A \otimes B_j)$$

Exercise II.3.15 の解答内の性質 8 を用いて既約性を示す。 $V_j$  が open なので  $X \times V_j$  は open であり、 $X \times V_j = \text{Spec}(A \otimes B_j)$  は仮定より  $\mathfrak{N}(A \otimes B_j)$  が prime ideal なので既約である (Example 3.0.1)。

$Y$  が既約なので  $V_j \cap V_k \neq \emptyset$  から  $\iota : \text{Spec } B_{jk} \hookrightarrow V_j \cap V_k$  となる  $B_{jk}$  が存在し (Exercise II.3.1 の性質 1)、 $\text{Spec } B_{jk} \neq \emptyset$  である。よって、

$$1 \times \iota : \text{Spec } A \times \text{Spec } B_{jk} \rightarrow \text{Spec } A \times (\text{Spec } B_j \cap \text{Spec } B_k) \quad (3)$$

において  $\text{Spec } A \times \text{Spec } B_{jk} = \text{Spec}(A \otimes B_{jk}) \neq \emptyset$  から  $\text{Spec } A \times (\text{Spec } B_j \cap \text{Spec } B_k) \neq \emptyset$  となるので、

$$(X \times V_j) \cap (X \times V_k) = \text{Spec } A \times (\text{Spec } B_j \cap \text{Spec } B_k) \neq \emptyset \quad (4)$$

である。よって  $X \times Y$  は既約となる。

(ii)  $X$  が一般の scheme の場合

$X \times Y = (\bigcup_i U_i) \times Y = \bigcup_i (U_i \times Y)$  において、 $U_i \times Y$  は open、かつ (i) より既約である。また  $V_j = \text{Spec } B_j \xrightarrow{\iota'} Y$  とすると、(i) より  $X \times V_j$  は既約ゆえ  $(U_i \times V_j) \cap (U_k \times V_j) \neq \emptyset$  である。すると式 (3) と同様に

$$1 \times \iota' : (U_i \cap U_k) \times \text{Spec } B_j \rightarrow (U_i \cap U_k) \times Y$$

が存在するので、 $(U_i \times Y) \cap (U_k \times Y) \neq \emptyset$  を得る。従って、Exercise II.3.15 の性質 8 から  $X \times Y$  は既約である。

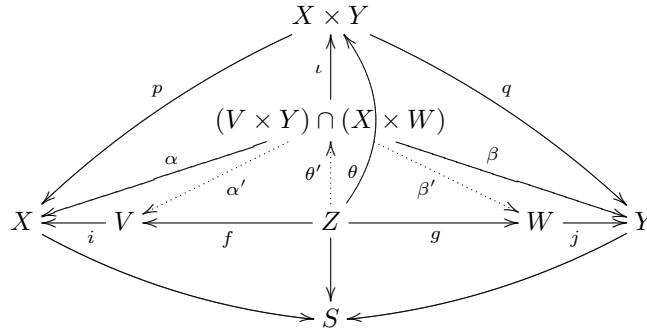
さらに  $A_i \otimes B_j$  が整域ならば  $U_i \times V_j$  は integral、よって既約性と合わせて  $X \times Y$  は integral となる。(証明終)

性質 2. Scheme 系列  $V \hookrightarrow X \rightarrow S$ ,  $W \hookrightarrow Y \rightarrow S$  に対し

$$V \times_S W = (V \times_S Y) \cap (X \times_S W)$$

が成り立つ。

(証明) Fiber product の U.P. を用いて証明する。



上図において、 $\iota, i, j$  は実際は inclusion ( $\subseteq$ ) である。

$$p\theta = if, q\theta = jg$$

より  $p\theta(Z) = f(Z) \subseteq V \Rightarrow \theta(Z) \subseteq p^{-1}(V) = V \times Y$ 、同様に  $\theta(Z) \subseteq X \times W$  なので

$$\theta(Z) \subseteq (V \times Y) \cap (X \times W)$$

従って  $\theta$  は実質  $\theta' : Z \rightarrow (V \times Y) \cap (X \times W)$  である。

$\alpha := p\iota = p|_{(V \times Y) \cap (X \times W)}$ ,  $\beta := q\iota = q|_{(V \times Y) \cap (X \times W)}$  とおくと

$$\alpha((V \times Y) \cap (X \times W)) = p((V \times Y) \cap (X \times W)) \subseteq p(V \times Y) \subseteq V$$

$$\Rightarrow \alpha((V \times Y) \cap (X \times W)) \subseteq V$$

なので、 $\alpha$  は実質  $\alpha' : (V \times Y) \cap (X \times W) \rightarrow V$  に等しい。

よって、 $\alpha\theta' = p\iota\theta' = p\theta = if$  から  $\alpha'\theta' = f$  となり、同様にして  $\beta'\theta' = g$  を得る。

$\theta'$  の他に  $\delta : Z \rightarrow (V \times Y) \cap (X \times W)$  が存在して、 $\alpha'\delta = f$ ,  $\beta'\delta = g$  を満たしたとする。すると、 $\alpha\delta = if \Rightarrow p\iota\delta = if$ ,  $\beta\delta = jg \Rightarrow q\iota\delta = jg$  となり、 $\theta$  の一意性から  $\iota\delta = \iota\theta'$ 、よって  $\delta = \theta'$  となる。

従って、fiber product の U.P. から  $V \times_S W = (V \times_S Y) \cap (X \times_S W)$  が成立する。(証明終)

## 2.6.2

Variety は既約であり、noetherian, reduced, separated は明らかなので、 $X$  は (\*) を満たす。

(a)  $\mathbf{P}_k^n$  の prime divisor は codim 1 の既約閉なので Exercise I.2.8 より irreducible hypersurface であり、 $V = V((f))$ ,  $f \in S = k[x_0, \dots, x_n]$ ,  $f$ : irreducible homogeneous polynomial で与えられる。

$V \cap X$  の既約成分を  $\{Y_i\}$  とすると、 $Y_i$  は  $X$  の prime divisor である。 $Y_i$  に対し、 $Y_i \cap U \neq \emptyset$  となる  $\mathbf{P}_k^n$  の open covering の一つが存在するので、それを  $U_i$  とおく。以下、ここでは  $U_i = D_+(x_i)$  とする。

$V = V((f))$  とすると  $V \cap U_i = V((f)_{(x_i)})$  である。なぜなら  $V((f)) = \text{Proj } S/(f)$  より、 $V \cap U_i$  は  $V$  における  $D_+(x_i)$ 、即ち  $D_+^V(x_i) = \text{Spec } (S/(f))_{(x_i)} = \text{Spec } (S_{(x_i)}/(f)_{(x_i)}) = V((f)_{(x_i)})$  だからである。ここで  $f_i = f(x_0/x_i, \dots, x_n/x_i) = f/x_i^{\deg f}$  とおくと  $V \cap U_i = V((f_i))$ ,  $f_i \in K(U_i) = K(\mathbf{P}_k^n) = k[x_0, \dots, x_n]_{((0))}$  となる。

このとき、 $\overline{f_i} = f_i|_{X \cap U_i}$  とすると<sup>3</sup>、 $Y_i \cap U_i$  が  $X \cap U_i$  の prime divisor ゆえ  $v_{Y_i \cap U_i}(\overline{f_i})$  が存在する。

ここで、もし  $U_i$  の他に  $Y_i \cap U_j \neq \emptyset$  とする。 $Y_i = \{\zeta\}^-$  のとき、 $\zeta \in Y_i \cap U_i$ ,  $\zeta \in Y_i \cap U_j$  より  $\mathcal{O}_{Y_i \cap U_i, \zeta} = \mathcal{O}_{Y_i \cap U_j, \zeta} = \mathcal{O}_{X, \zeta}$  となるので、これらの max ideal  $\mathfrak{m}$  は一致する。よって  $f_i = f/x_i^{\deg f} \in \mathfrak{m}^r \Leftrightarrow f/x_j^{\deg f} \in \mathfrak{m}^r$  から  $v_{Y_i \cap U_i}(\overline{f_i}) = v_{Y_i \cap U_j}(\overline{f_j})$  が得られる。 $\overline{f_j} \in K(X \cap U_i) = K(X)$  なので、 $v_{Y_i \cap U_j}(\overline{f_j}) = v_{Y_i}(\overline{f_j}) = n_i$  となる。

よって

$$\varphi : \text{Div } \mathbf{P}_k^n \rightarrow \text{Div } X, V \mapsto V.X$$

が定義できる。

(b)  $D = (f)$ ,  $f \in K(\mathbf{P}_k^n)$  に対し、 $f = \prod_l f_l^{n_l}$ ,  $f_l \in k[x_0, \dots, x_n]$  とする。 $D = \sum_l n_l V_l$ ,  $V_l = V(f_l)$  から  $D.X = \sum_l n_l (V_l.X)$  である。

$X$  の prime divisor を  $\{Z_j\}$  とし、 $f_l^i = f_l/x_i^{\deg f_l}$ , for  $Z_j \cap U_i \neq \emptyset$ ,  $\exists U_i = D_+(x_i)$  とおくと、 $V_l \cap U_i = V(f_l^i)$  である。(a) で示したように、 $Z_j \cap U_i \neq \emptyset$  ならどの  $i$  でもよい。ここで選ばれる  $i$  は  $l$  に依存するので、その  $f_l^i$  をあらためて  $f_l$  とおく ( $\deg f_l = 0$ )。すると

$$V_l.X = \sum_j v_{Z_j}(f_l) Z_j$$

となる。実際、 $V_l \cap X$  の既約成分は  $X$  の prime divisor であり ((a) で示した)、それ以外の  $X$  の prime divisor  $Z_j$  では  $v_{Z_j}(\overline{f_l}) = 0$  となる。なぜなら、もし  $v_{Z_j}(\overline{f_l}) > 0$

<sup>3</sup>一般に、 $Z$  に対応する prime ideal を  $I_Z$ ,  $S(Z) = S/I_Z$  とおく。 $Z \hookrightarrow \mathbf{P}_k^n$  から  $Z = \{\eta\}^-$  とすると ( $\eta$  は  $I_Z$  に対応)、 $i_\eta^\# : \mathcal{O}_{\mathbf{P}_k^n, i(\eta)} = S_{(\eta)} \rightarrow \mathcal{O}_{Z, \eta} = S(Z)_{(\eta)} = (S/I_Z)_{(\eta)} = K(Z)$  が存在し (Exercise 2.18(c))、その拡張として  $\varphi : K(\mathbf{P}_k^n) \rightarrow K(Z)$  が得られる。 $f \in K(\mathbf{P}_k^n)$  のとき、 $f|_Z$  は  $\varphi(f)$  のことである。実際、 $z \in Z$  は  $S/I_Z$  の prime ideal なので  $z \supseteq \eta$  であり、よって  $f$  を  $Z$  に制限するということは  $z \supseteq \eta$  なる  $z$  のみを扱うということなので、 $\varphi(f)$  に等しい。なお、 $i(\eta)$  は  $S/I_X$  の prime ideal である  $\eta$  に対する  $S$  の prime ideal であり、それは  $\eta$  なので  $i(\eta) = \eta$  となる。

とすると、 $Z_j \cap U_i \neq \emptyset$  となる  $U_i$  に対して、 $v_{Z_j}(\bar{f}_i) = v_{Z_j \cap U_i}(\bar{f}_i)$  より、 $U_i$  において  $Z_j$  に対応する prime ideal を  $\mathfrak{p}_j$  とすると、 $\bar{f}_i \in \mathfrak{p}_j \Rightarrow V_i \cap U_i|_{X \cap U_i} = V(\bar{f}_i) \supseteq V(\mathfrak{p}_j) = Z_j \cap U_i$  となり、 $Z_j$  の仮定に反するからである。  
よって

$$D.X = \sum_l n_l \sum_j v_{Z_j}(\bar{f}_l) Z_j = \sum_j v_{Z_j} \left( \prod_l \bar{f}_l^{n_l} \right) Z_j$$

となるが、 $f' = \prod_l \bar{f}_l^{n_l}$  とすると  $\deg f' = 0 \Rightarrow f' \in K(\mathbf{P}_k^n)$  より  $D.X = (f')$  である。

(c)  $S/(I_X + I_V) = (S/I_X)/((I_X + I_V)/I_X) = S(X)/(I_V/(I_V \cap I_X))$  なので、閉集合  $Y_j$  に対応する  $S$  の prime ideal を  $\mathfrak{p}_j$  とすると、

$$S/(I_X + I_V)_{(\mathfrak{p}_j)} = (S(X))_{(\mathfrak{p}_j)}/(I_V/(I_V \cap I_X))_{(\mathfrak{p}_j)} = S(X)_{(\mathfrak{p}_j)}/(\bar{f}_i)_{(\mathfrak{p}_j)} = \mathcal{O}_{X, \mathfrak{p}_j}/(\bar{f}_i)_{(\mathfrak{p}_j)}$$

が成り立つ。ここで、 $I_V = (f)$  であり、脚注 3 から  $I_V/(I_V \cap I_X) = (\bar{f})$  なので、 $\mathfrak{p}_j \in Y_j \cap U_i \neq \emptyset$  とすると、 $\mathfrak{p}_j$  で localize することにより、 $(I_V/(I_V \cap I_X))_{(\mathfrak{p}_j)} = (\bar{f})_{(\mathfrak{p}_j)} = ((\bar{f})|_{U_i})_{(\mathfrak{p}_j)} = (\bar{f}_i)_{(\mathfrak{p}_j)}$  となることを用いた。

$i(X, V; Y_j) = \text{length } S/(I_X + I_V)_{(\mathfrak{p}_j)} = \text{length } \mathcal{O}_{X, \mathfrak{p}_j}/(\bar{f}_i)_{(\mathfrak{p}_j)}$  であるが、 $\mathcal{O}_{X, \mathfrak{p}_j}$  は次元 1 の regular なので、その ideal は max ideal  $\mathfrak{m}_j = \mathfrak{p}_j_{(\mathfrak{p}_j)}$  の冪乗となる ([1], Proposition 9.2, (v))。従って、その長さは  $\mathfrak{m}_j^0 \supseteq \mathfrak{m}_j^1 \supseteq \cdots \supseteq \mathfrak{m}_j^r = (\bar{f}_i)$  となる  $r$ 、すなわち  $v_{Y_j}(\bar{f}_i)$  に等しい<sup>4</sup>。

$D = \sum_l n_l V_l$ ,  $V_l = V(f_l)$ ,  $f_l \in k[x_0, \dots, x_n]$  とする。すでに示したことから  $V_l.X = \sum_j i(X, V_l; Y_j) Y_j$  なので、Theorem I.7.7 より

$$\deg V_l.X = \sum_j i(X, V_l; Y_j) \deg Y_j = \deg X \cdot \deg V_l$$

となる。従って

$$\deg D.X = \sum_l n_l \deg V_l.X = \sum_l n_l \deg V_l \cdot \deg X = \deg D \cdot \deg X \quad (5)$$

が成り立つ。

(d)  $D = (g)$ ,  $g \in K(X)$  とする。Closed immersion  $i : X \hookrightarrow \mathbf{P}_k^n$  に対する

$$i_x^\# : \mathcal{O}_{\mathbf{P}_k^n, i(x)} = S_{(\mathfrak{p}_x)} \rightarrow \mathcal{O}_{X, x} = (S/I_X)_{(\mathfrak{p}_x)} = S(X)_{(\mathfrak{p}_x)}$$

は全射であり、 $\varphi : K(\mathbf{P}_k^n) \rightarrow K(X)$  も全射となる。よって  $g = g_1/g_0 \in K(X)$ ,  $g_0, g_1 \in S(X)$  に対して、 $\varphi(f) = g$  となる  $f = f_1/f_0 \in K(\mathbf{P}_k^n)$ ,  $f_0, f_1 \in S$  が存在する。

$\varphi$  は環準同型なので、 $f$  と  $g$  の既約多項式分解が対応する。すなわち  $f = \prod_l f_l^{n_l}$  とすると  $g$  の既約多項式分解は  $g = \prod_l g_l^{m_l}$ ,  $g_l = \varphi(f_l)$  となる。実際、 $g_l = g_1 g_2$  とすると、全射性から  $f_l$  も可約となってしまう。

<sup>4</sup> $\mathfrak{m}_j = \mathfrak{p}_j_{(\mathfrak{p}_j)}$  であるが、実質  $\mathfrak{m}_j = \mathfrak{p}_j$  なので  $\mathfrak{m}_j^r = (\bar{f}_i)$  としてよい。

(a) で示したように、 $f_l$  の  $X$  への像が  $\bar{f}_l$  なので、 $\bar{f}_l = g_l$  である。よって (b) から

$$(f).X = \sum_l n_l \sum_j v_{Z_j}(\bar{f}_l) Z_j = \sum_j v_{Z_j}(\prod_l g_l^{n_l}) Z_j = \sum_j v_{Z_j}(g) Z_j = (g) = D$$

が得られる。すると (c) と Proposition 6.4 から

$$\deg D = \deg((f).X) = \deg(f) \cdot \deg X = 0$$

となる。

$\psi: \mathrm{Cl} \mathbf{P}_k^n \rightarrow \mathrm{Cl} X$ ,  $D \mapsto D.X$  とすると、式 (5) は  $\deg \circ \psi = (\deg X) \deg$  なのでテキストの可換図式そのものである。

Proposition 6.4(c) から  $\deg: \mathrm{Cl} \mathbf{P}_k^n \rightarrow \mathbb{Z}$  は単射であり、Proposition I.7.6(a) より  $\deg X \neq 0$ 、よって  $(\deg X) \deg: \mathrm{Cl} \mathbf{P}_k^n \rightarrow \mathbb{Z}$  も単射、すると  $\deg \circ \psi: \mathrm{Cl} \mathbf{P}_k^n \rightarrow \mathbb{Z}$  が単射となり、 $\psi: \mathrm{Cl} \mathbf{P}_k^n \rightarrow \mathrm{Cl} X$  は単射である。

### 2.6.3

(a)  $P = (0, \dots, 0, 1) \in \mathbf{P}^{n+1}$  とすると、 $\pi$  は

$$\pi: \mathbf{P}^{n+1} - P \rightarrow \mathbf{P}^n, (a_0, \dots, a_n, a_{n+1}) \mapsto (a_0, \dots, a_n)$$

で与えられる。 $\mathbf{P}^n$  のカバークバー  $V_i = D_+(x_i) \approx \mathbf{A}^n$  に対し、 $U_i = V \cap V_i$  とおくと

$$\begin{aligned} \pi^{-1}(U_i) &= \{(a_0, \dots, a_n, a_{n+1}) \mid (a_0, \dots, a_n) \in U_i, \forall a_{n+1} \in k\} \\ &\approx \mathbf{A}^n \times \mathbf{A}^1 = \mathbf{A}^n \times_k \mathbf{A}^1 \approx U_i \times_k \mathbf{A}^1 \end{aligned}$$

となり、

$$\pi^{-1}(V) = V \times_k \mathbf{A}^1 \tag{6}$$

を得る。

$X$  は  $k$  上ゆえ、 $X \supseteq \mathrm{Spec} A$  とすると  $A \otimes_k k[t] = A[t] = A \otimes \mathbb{Z}[t]$  なので、 $X \times \mathbf{A}^1 = X \times_k \mathbf{A}_k^1$  であり、Proposition 6.6 が使えて

$$\mathrm{Cl} V \cong \mathrm{Cl}(V \times \mathbf{A}^1) = \mathrm{Cl}(\pi^{-1}(V)) = \mathrm{Cl}(\bar{X} - P) \tag{7}$$

が成立する。ここで、 $\dim \bar{X} \geq \dim(U_i \times \mathbf{A}^1) = n+1 \geq 2$  より  $\mathrm{codim}(P, \bar{X}) \geq 2$  なので、Proposition 6.5(b) から  $\mathrm{Cl}(\bar{X} - P) = \mathrm{Cl} \bar{X}$  ゆえ

$$\mathrm{Cl} V \cong \mathrm{Cl} \bar{X}$$

となる。

なお、 $V$  は (\*) を満たしているので、式 (7) から  $\bar{X} - P$  も (\*) を満たす。このとき  $\bar{X}$  は regular in codim 1 である。なぜなら、 $x \neq P$  なら  $O_{\bar{X}, x} = O_{\bar{X}-P, x}$  より regular in codim 1 であり、 $x = P$  のときは、 $O_{\bar{X}, x} = O_{\mathbf{P}^{n+1}, P} = S_{((x_{n+1}))} \approx$

$k[x_0, \dots, x_n]$  は整閉ゆえ、 $\bar{X}$  も regular in codim 1 となる。その他の条件は明らかなので、 $\bar{X}$  は (\*) を満たす。

すると、 $X = \mathbf{A}^{n+1} \cap \bar{X}$  から  $X$  は integral であり (noetherian, separated は明らか)、 $\mathcal{O}_{X,x} = \mathcal{O}_{\bar{X},x}$  から regular in codim 1 なので、 $X$  も (\*) を満たす。 $X - P$  も同様である。

(b)  $\mathbf{P}^n$  において  $V = Z_n(\mathfrak{p})$  とする ( $Z_n(\cdot)$  は  $\mathbf{P}^n$  における  $Z(\cdot)$  のことで、以下では  $\mathbf{P}^{n+1}$  における場合は  $Z(\cdot)$  と記す)。ここで  $\mathfrak{p}$  は  $k[x_0, \dots, x_n]$  の斉次 prime ideal である。このとき、 $V \subseteq \bar{X}$  となる  $V$  は  $V' = Z((\mathfrak{p}^e, x_{n+1}))$  のことであり、 $\mathbf{P}^{n+1}$  では  $\{(a_0, \dots, a_n, 0) \mid (a_0, \dots, a_n) \in V\}$  のことである。

$H_{n+1} = Z(x_{n+1})$  とすると、 $\bar{X} = Z(\mathfrak{p})$  なので  $H_{n+1} \cap \bar{X} = Z((\mathfrak{p}^e, x_{n+1})) = V'$  であり、 $H_{n+1} \cdot \bar{X} = V'$  となる。なぜなら hyperplane  $H_{n+1} = (x_{n+1})$  に対しては  $v_{V'}(x_{n+1}) = 1$  にしかなり得ないからである。

$H = Z_n(g)$ ,  $g$ : 斉次 1 次式 のとき  $H' \cdot \bar{X} = \pi^*(V.H)$ ,  $H' := \pi^{-1}(H) = Z(g)$  が成り立つ。

( $\cdot$ )  $V \cap H = \bigcup_i Y_i$  を既約成分分解とすると、 $Y_i$  は prime divisor である (Exercise 6.2(a))。

$$V.H = \sum_i n_i Y_i, \quad n_i = v_{Y_i}(\bar{g}_i), \quad g_i = g/x_i^{\deg g}, \quad \bar{g}_i = g_i|_{V \cap V_i}$$

$$\pi^*(V.H) = \sum_i n_i \pi^{-1}(Y_i)$$

ここで  $g_i$  は  $V_i$  で local に  $H$  を表す equation である。

一方  $H' := \pi^{-1}(H) \not\subseteq P$  ゆえ

$$\bar{X} \cap H' = (\bar{X} - P) \cap H' = \pi^{-1}(V) \cap \pi^{-1}(H) = \pi^{-1}(V \cap H)$$

$$= \pi^{-1}\left(\bigcup_i Y_i\right) = \bigcup_i Z_i, \quad Z_i = \pi^{-1}(Y_i)$$

よって  $\bar{X} \cap H' = \bigcup_i Z_i$  となる。 $Z_i = \pi^{-1}(Y_i)$  は  $\bar{X}$  の prime divisor であり、 $H' = Z(g)$  から

$$\bar{X} \cdot H' = \sum_i l_i Z_i, \quad l_i = v_{Z_i}(\bar{g}_i)$$

ここで  $g_i$  は local に  $H'$  を表すものにもなっている。

$\pi: Z_i \rightarrow Y_i$  は全射だから、 $Z_i = \{\eta\}^-$  とすると、

$$Y_i = \pi(Z_i) = \pi(\{\eta\}^-) \subseteq \{\pi(\eta)\}^-$$

より  $\pi(\eta)$  は生成元であり、 $\mathcal{O}_{V,\pi(\eta)} \hookrightarrow \mathcal{O}_{\bar{X},\eta}$  は単射、local homomorphism 性からそれらの max ideal は対応する。従って、 $n_i = v_{Y_i}(\bar{g}_i) = v_{Z_i}(\bar{g}_i) = l_i$  が得られる。

以上により  $H' \cdot \bar{X} = \pi^*(V.H)$  が成り立つ。(( $\cdot$ ) 終)



$H' - H_{n+1} = (g/x_{n+1})$  は principal なので  $\overline{X} \cdot (H' - H_{n+1}) = \overline{X} \cdot H' - \overline{X} \cdot H_{n+1} = \pi^*(V.H) - V'$  も principal であり (Exercise II.6.2(b)),  $\text{Cl } \overline{X}$  において

$$\pi^*(V.H) = V'$$

が成り立つ。

Proposition 6.5(c) より exact 系列

$$\mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \text{Cl } \overline{X} \rightarrow \text{Cl}(\overline{X} - V) \rightarrow 0, 1 \xrightarrow{\iota} V'$$

が得られる。ここで  $\iota$  は単射である。なぜなら、もし  $nV$  が principal とするとその deg は 0 となるので (Corollary 6.10)、 $\deg nV = n \deg V = 0$  となるが、Proposition I.7.6(a) より  $\deg V \neq 0$  なので  $n = 0$  だからである。

$$\overline{X} = \pi^{-1}(V) \cup P = \{(a_0, \dots, a_n, a_{n+1}) \mid (a_0, \dots, a_n) \in V, a_{n+1} \in k\} \cup P$$

$$\overline{X} - V' = \{(a_0, \dots, a_n, a_{n+1}) \mid (a_0, \dots, a_n) \in V, a_{n+1} \neq 0 \in k\} \cup P$$

$\{(a_0, \dots, a_n)\}$  は  $\mathbf{A}^{n+1}$  を  $\mathbf{P}^{n+1}$  の  $D_+(x_{n+1})$  とみなしたときの  $(n+1)$  成分は非零、0 を含めた  $Z^A(\mathbf{p}) = C(V) = X$  に等しい ( $Z^A(\cdot)$  は  $\mathbf{A}^{n+1}$  での  $Z(\cdot)$  のこと)。

以上から上記 exact 系列は

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \text{Cl } \overline{X} \rightarrow \text{Cl } X \rightarrow 0, 1 \xrightarrow{\iota} V'$$

となる。ここで  $\text{Cl } \overline{X} \approx \text{Cl}(\overline{X} - P)$  (Proposition 6.5(b)) と  $\pi^* : \text{Cl } V \xrightarrow{\sim} \text{Cl}(\overline{X} - P)$  ((a) で示した) から  $\text{Cl } V \approx \text{Cl } \overline{X}$  が得られるが、すでに述べたように  $\pi^*(V.H)$  と  $V'$  は linearly equivalent なので、 $\text{Cl } \overline{X}$  における  $V'$  は  $\text{Cl } V$  における  $V.H$  に相当する。なお、Proposition 6.5(b) の証明にあるように  $\text{Cl } \overline{X}$  と  $\text{Cl}(\overline{X} - P)$  は同じなので、 $\pi^*(V.H)$  は  $\text{Cl } \overline{X}$  の元と考えてよい。以上により exact 系列

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \text{Cl } V \xrightarrow{\delta} \text{Cl } X \rightarrow 0, 1 \xrightarrow{\iota} V.H \quad (8)$$

が得られる。

この式を書き直すと

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \text{Cl } V \xrightarrow{\pi^*} \text{Cl}(\overline{X} - P) \rightarrow \text{Cl } X \rightarrow 0, 1 \xrightarrow{\iota} V.H$$

となるが、 $\text{Cl}(\overline{X} - P) = \text{Cl } \overline{X}$  であり、また  $\text{Cl}(\overline{X} - V) = \text{Cl}(\overline{X} - V - P) = \text{Cl}(X - P)$  より

$$\text{Cl}(\overline{X} - P) = \text{Cl } \overline{X} \xrightarrow{\beta} \text{Cl}(\overline{X} - V) = \text{Cl}(\overline{X} - V - P) = \text{Cl}(X - P) \xrightarrow{\gamma} \text{Cl } X$$

を得る。ここで

$$\beta : \text{Cl}(\overline{X} - P) \rightarrow \text{Cl}(X - P) \leftarrow \text{restriction to } X - P$$

$$\gamma : \text{Cl}(X - P) \xrightarrow{\sim} \text{Cl } X \leftarrow \text{inclusion in } X$$

とみれば、 $\delta = \gamma\beta\pi^*$  となる。

(c)  $S(V)$ : ufd とする。

このとき  $S(V)$  は整閉ゆえ ([1], p.63 上)、projectively normal である。また、 $X$  を  $\mathbf{A}^{n+1}$  における affine variety とみなすと、そこでも  $S(V)$  は ufd なので、Proposition 6.2 より  $\text{Cl} X = 0$  が得られる。よって式 (8) は

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \text{Cl} V \rightarrow 0, \quad 1 \xrightarrow{\iota} V.H$$

となり、 $\iota$  は isomorphism である。さらに  $\text{im } \iota = \text{Cl} V$  なので、 $\text{Cl} V$  は  $\mathbb{Z}$  上  $V.H$  で生成される。

逆を証明する。

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\alpha} \text{Cl} V \rightarrow \text{Cl} X \rightarrow 0$$

において  $\alpha$  が isomorphism なので  $\text{Cl} X = 0$  である。また、 $V$  が projectively normal なので  $S(V)$  は整閉、よって  $S(V)_x = \mathcal{O}_x$ ,  $x \in V$  も整閉となり  $X = \text{Spec } S(V)$  は normal である。従って Proposition 6.2 から、 $S(V)$  は ufd である。

(d)  $\mathbf{P}^n$  における  $V$  の homogeneous coordinate ring を  $S(V) = S/I$  としたとき、 $S(V)$  は  $\mathbf{A}^{n+1}$  における  $X$  の coordinate ring と見られる。

$$\alpha : S(V) \rightarrow S(V)_{\mathfrak{m}}, \quad \mathfrak{m} = (x_0, \dots, x_n) \sim P = (0, \dots, 0)$$

高さ 1 の prime ideal  $\mathfrak{p}$  は  $\alpha$  により

$$\mathfrak{p} \rightarrow \begin{cases} \mathfrak{p}; & \mathfrak{p} \subseteq \mathfrak{m} \\ (1); & \mathfrak{p} \not\subseteq \mathfrak{m} \end{cases}$$

と写り、 $\mathfrak{p} \subseteq \mathfrak{m}$  の場合、高さは 1 のままである。

$$\beta : \text{Spec } \mathcal{O}_P \rightarrow X, \quad \alpha = \beta^\#(X)$$

$$\beta^* : \text{Cl} X \rightarrow \text{Cl}(\text{Spec } \mathcal{O}_P)$$

$$Y \mapsto \beta^{-1}(Y)$$

が定義できることを示す。まず、

$$\beta^* : \text{Div} X \rightarrow \text{Div}(\text{Spec } \mathcal{O}_P)$$

が成り立つのは (便宜上同じ記号  $\beta^*$  を用いる)、prime divisor  $Y = Z(\mathfrak{p}) \ni 0$  なら  $\mathfrak{p} \subseteq \mathfrak{m}$  なので ( $Y \ni 0 \Leftrightarrow \mathfrak{p} \subseteq \mathfrak{m}$ )、

$$\beta^{-1}(Y) \stackrel{\text{Prop. 2.3}}{=} Z(\alpha(\mathfrak{p})) = Z(\mathfrak{p}) = Y$$

は closed, integral, codim 1 であり、また  $Y \not\ni 0$  なら

$$\beta^{-1}(Y) = Z(\alpha(\mathfrak{p})) = Z(S(V)_{\mathfrak{m}}) = \emptyset$$

だからである。

Principal divisor が principal divisor に写るのは、次の通り。

$$\beta^*((f)) = \sum_i v_{Y_i}(f)\beta^{-1}(Y_i) = \sum_{Y_i \ni 0} v_{Y_i}(f)Y_i, \quad f \in K(X) = K(\text{Spec } \mathcal{O}_P)$$

において、 $\text{Spec } \mathcal{O}_P$  の prime divisor  $Y$  は  $\mathfrak{p} \subseteq \mathfrak{m}$  に対応しており、それは  $X$  における prime divisor  $Y_i \ni 0$  と一対一対応している。よって、 $\sum_{Y_i \ni 0} v_{Y_i}(f)Y_i = \sum_Y v_Y(f)Y = (f) \in \text{Div}(\text{Spec } \mathcal{O}_P)$  が成り立つ。またこの一対一対応から、 $\beta^*|_{\mathcal{D}}$  は全単射である。ここで  $\mathcal{D} \subseteq \text{Div } X$  は  $\{Y | Y \ni 0\}$  から生成される部分集合である。

従って、 $Y \not\ni 0$  となる  $X$  の prime divisor は principal divisor であることを示せば証明は終わる。

$\mathfrak{p} \not\subseteq \mathfrak{m}$  とすると、非零定数項を持つ既約多項式  $f \in \mathfrak{p}$  が存在する。 $S(V) = S/I$  とすると  $I$ : prime ideal,  $I \subset \mathfrak{m}$  に対し  $f \notin I$  ゆえ、 $fg \in I \Rightarrow g \in I$  から、この  $f$  は非零因子であり、非零元でもある。よって、クルルの単項イデアル定理より  $\text{height}((f)) = 1$  となる。 $(f) \subseteq \mathfrak{p}$ ,  $\text{height}(\mathfrak{p}) = 1$  から  $\mathfrak{p} = (f)$ 、よって divisor として  $Y = (f)$ 、principal divisor である<sup>5</sup>。

#### 2.6.4

$B = k[x_1, \dots, x_n]$ ,  $C = k(x_1, \dots, x_n)$  とおくと、 $A = B[z]/I$ ,  $K = \text{Frac}(A) \stackrel{\S}{=} C[z]/I$ ,  $I = (z^2 - f)$  となる。 $\S$  は、 $K$  において  $\frac{1}{g_0 + g_1 z} = \frac{g_0 - g_1 z}{g_0^2 - g_1^2 f}$  が成り立つことによる。

$K$  の自己同型  $\sigma: z \mapsto -z$  の固定体は  $C$  であり、また  $K$  は  $C$  上有限拡大体なので、 $C$  の正規拡大体 (Galois 拡大体) となる。

$K$  の元を  $\alpha = g + hz$ ,  $g, h \in C$  とすると、 $(\alpha - g)^2 = h^2 z^2 = h^2 f$  から  $\alpha$  は

$$F(X) = X^2 - 2gX + g^2 - h^2 f$$

の解である。 $\alpha$  の最小多項式が 1 次式ではあり得ないので、 $F(X)$  は最小多項式となる。

$\bar{\alpha} = g - hz$  と定義すると、これは  $F(X)$  の共役解となり、解と係数の関係から  $\alpha + \bar{\alpha} = 2g$ ,  $\alpha\bar{\alpha} = g^2 - h^2 f$  を得る。

このとき、次式が成立する。

$$\alpha : \text{integral over } B \stackrel{\%}{\Leftrightarrow} g, h \in B \Leftrightarrow \alpha \in A$$

( $\Rightarrow$ )  $\stackrel{\%}{\Leftrightarrow}$   $\alpha$  が  $B$  上整なので、その共役  $\bar{\alpha}$  も  $B$  上整である。よって  $\alpha + \bar{\alpha} = 2g$ ,  $\alpha\bar{\alpha} = g^2 - h^2 f$  も  $B$  上整となる ([1], Corollary 5.3)。 $g, h \in C \Rightarrow 2g, g^2 - h^2 f \in C$  で、 $B$  は整閉 ( $C$  において整閉) ゆえ、 $g, g^2 - h^2 f \in B \Rightarrow h^2 f \in B$  が得られる。

$h = \beta/\gamma$ ,  $\text{gcd}(\beta, \gamma) = 1$ ,  $\beta, \gamma \in B$  において  $\gamma \notin k$  とすると、 $\beta^2 f/\gamma^2 \in B$  から  $f$  は  $\gamma^2$  で割り切れてしまい、 $f$  の仮定に反する。よって  $\gamma \in k \Rightarrow h \in B$  である。 $\stackrel{\%}{\Leftrightarrow}$  は明らか。

<sup>5</sup>  $v_Y(f) = 1$  は明らか。  $v_Z(f) \neq 0$  のとき  $v_Z(f) > 0$  と仮定してよく、 $f \in \eta$ ,  $Z = \{\eta\}^- \Rightarrow (f) \subseteq \eta \Rightarrow Z((f)) \supseteq Z$  から、両者の  $\dim$  が等しいので、 $Z = Y$  となる。

従って  $A = \tilde{B}$  ( $K$  における  $B$  の整閉包) である。 ( $\cdot$ : 終)  
 $\tilde{B}$  は整閉なので ([1], Corollary 5.5)、 $A$  も整閉となる。

## 2.6.5

(a)  $r \geq 2$  のとき、Exercise I.5.12(b) から  $f = -x_1^2 - \cdots - x_r^2$  は既約多項式、よって square free である。Exercise 6.4 より

$$A = k[x_0, x_1, \dots, x_r]/(x_0^2 - f) = k[x_0, x_1, \dots, x_r]/(x_0^2 + x_1^2 + \cdots + x_r^2)$$

は整閉なので、local 性から  $\mathcal{O}_x = A_x$  も整閉である。従って、 $X = \text{Spec } A$  は normal となり (\*) を満たす。また  $X$  に対応する  $V \subseteq \mathbf{P}^n$  も (\*) を満たす ( $A_x$  が整閉だから)。

(b)  $k$  は代数的閉体とする。  $x_0^2 + x_1^2 + \cdots + x_r^2 = 0$  において、  $u = ix_0 + x_1$ ,  $v = ix_0 - x_1$  とおけば  $uv = -x_0^2 - x_1^2$  となるので、そこで改めて  $u, v$  を  $x_0, x_1$  とおけば

$$x_0x_1 = x_2^2 + \cdots + x_r^2 \quad (9)$$

となる。

(1)  $r = 2$ :  $X' = \text{Spec } k[x_0, x_1, x_2]/I$ ,  $I = (x_0x_1 - x_2^2)$  とすると、Example 6.5.2 から  $\text{Cl } X' \cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  である。ここで、 $X' \times_k \mathbf{A}^{n-2} = \text{Spec } (k[x_0, x_1, x_2]/I \otimes k[x_3, \dots, x_n]) = \text{Spec } k[x_0, x_1, \dots, x_n]/I = X$  から、Proposition 6.6 より  $\text{Cl } X = \text{Cl } X' = \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  を得る。

(2)  $r = 3$ :  $x_0x_1 = x_2^2 + x_3^2$  において  $x_2, x_3$  に対しても式 (9) と同様な変換を施すと、 $x_0x_1 = x_2x_3$  は  $\mathbf{P}^3$  の quadric surface  $V$  を与える。

その cone を  $X'$  とすると (Exercise II.6.3)、それは  $\mathbf{A}^4$  における quadric surface となり、対応する多項式は同じ  $x_0x_1 = x_2x_3$  である。

Example 6.6.1 から  $\text{Cl } V = \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}$  であり、Exercise II.6.3(b) の式 (8) は

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \hookrightarrow \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z} \rightarrow \text{Cl } X' \rightarrow 0$$

となる。従って準同型定理から  $\text{Cl } X' = (\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z})/\mathbb{Z} = \mathbb{Z}$  を得る。

前記 (1) で述べたように  $\text{Cl } X = \text{Cl } X'$  なので、 $\text{Cl } X = \mathbb{Z}$  である。

(3)  $r \geq 4$ :  $X$  における  $V(x_0)$  を  $Z = V^X(x_0) = V(x_0) \cap X = V(x_0, x_0x_1 + x_2^2 + \cdots + x_r^2)$  とすると  $Z$  は integral である。なぜなら、

$$k[x_0, x_1, \dots, x_n]/(x_0, x_0x_1 + x_2^2 + \cdots + x_r^2) = k[x_1, \dots, x_n]/(x_2^2 + \cdots + x_r^2)$$

において、 $x_2^2 + \cdots + x_r^2$  が既約多項式だからである (Exercise I.5.12(b))。

よって  $Z$  は prime divisor である。また  $Z$  は principal divisor となるが、それは脚注 (5) による。

Proposition 6.5(c) から

$$\mathbb{Z} \xrightarrow{\alpha} \text{Cl } X \rightarrow \text{Cl}(X - Z) \rightarrow 0, \quad \alpha : 1 \mapsto 1 \cdot Z$$

が成立するが、 $Z$  が principal divisor なので、 $\alpha = 0$  である。ここで、 $\text{Cl}(X-Z) = 0$  が成り立つ。

( $\because$ )  $X - Z = V^X(x_0)^c = D(x_0) = \text{Spec } A_{x_0}$  より

$$\begin{aligned} A_{x_0} &= k[x_0, x_1, \dots, x_n]_{x_0} / (x_0x_1 + x_2^2 + \dots + x_r^2)_{x_0} \\ &= k[x_0, x_0^{-1}, x_1, \dots, x_n] / (x_1 + (x_2^2 + \dots + x_r^2)/x_0) \\ &\approx k[x_0, x_0^{-1}, x_2, \dots, x_n] \end{aligned}$$

となるが、 $k[x_0, x_0^{-1}, x_2, \dots, x_n]$  は ufd なので、Proposition 6.2 より  $\text{Cl}(X-Z) = 0$  である。(  $\because$  終 )

以上により  $\alpha$  が全射となるので、 $\text{Cl } X = 0$  を得る。

(c)

(1)  $r = 2$ :  $Q = V((g))$ ,  $g = x_0x_1 - x_2^2$  とおくと、(b)(1) の  $\text{Cl } X = \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  から、式 (8) は

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \text{Cl } Q \rightarrow \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \rightarrow 0, \quad 1 \mapsto Q.H \quad (10)$$

となる。

ネーター空間の既約成分は有限個なので ([1], Exercise 6.7)、 $\text{Cl } Q$  は有限型であり、よって有限型加法群の構造定理から  $\text{Cl } Q = \mathbb{Z}^s \oplus T$ ,  $T$ : torsion、と書けるが ([4], 第 4 章定理 15)、ここでは  $s = 1$  である。

実際、次の完全系列

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \mathbb{Z}^s \oplus T \rightarrow \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \rightarrow 0$$

の右側から  $\mathbb{Q}$  を tensor すると、tensor は右完全なので

$$\mathbb{Q} \rightarrow \mathbb{Q}^s \oplus (T \otimes \mathbb{Q}) \rightarrow \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \otimes \mathbb{Q} \rightarrow 0$$

を得るが、 $\mathbb{Z}/l\mathbb{Z} \otimes \mathbb{Q}$  の任意の元は  $a \otimes b = la \otimes b/l$  となるので、 $\mathbb{Z}/l\mathbb{Z} \otimes \mathbb{Q} = 0$ 、よって  $T \otimes \mathbb{Q} = 0$ ,  $\mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \otimes \mathbb{Q} = 0$  から<sup>6</sup>、

$$\mathbb{Q} \rightarrow \mathbb{Q}^s \rightarrow 0$$

が成立する。一方、体からの morphism は常に injective なので、 $\mathbb{Q} \approx \mathbb{Q}^s$ 、よって  $s = 1$  となる ([1], Exercise 2.11)。

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \mathbb{Z} \oplus T \rightarrow \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \rightarrow 0, \quad 1 \mapsto Q.H \quad (11)$$

$H = V((x_2))$  とすると、 $Q \cap H = Y_0 \cup Y_1$ ,  $Y_i = V((x_i, x_2))$ ,  $i = 0, 1$  であり、 $v_{Y_i}(x'_2) = 1$  より  $Q.H = Y_0 + Y_1$  となる ( $x'_2$  は  $x_2$  を  $Y_i \cap U \neq \emptyset$  となる  $U$  で制限したもの)。

$Y_1 = V((x_1, x_2))$  より  $v_{Y_1}(x_1/x_0) = 1$  であり、同様に  $v_{Y_0}(x_1/x_0) = -1$  となるから  $(x_1/x_0) = \sum_i v_{Y_i}(x_1/x_0)Y_i = Y_1 - Y_0 \Rightarrow Y_1 \sim Y_0$  であり、 $Q.H = Y_0 + Y_1 = Y_0 + Y_0 = 2Y_0 = 2Y_1$  を得る。

<sup>6</sup>torsion  $T$  の元は有限位数を持つので ( $la = 0, \exists l \neq 0$ )、 $T \otimes \mathbb{Q} = 0$  である。

式 (11) の右から  $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$ , ( $p$ : 素数) を tensor すると、 $p \neq 2$  のとき、[1], Exercise 2.1 から

$$\begin{aligned} \mathbb{Z} \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} &\rightarrow (\mathbb{Z} \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}) \oplus (T \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}) \rightarrow \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} = 0 \\ &\Rightarrow \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} \xrightarrow{\iota'} \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} \oplus (T \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}) \rightarrow 0 \end{aligned}$$

より  $\iota'$  は全射となる。一方、 $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$  は体なので  $\iota'$  は単射でもある。よって、 $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z} = \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} \oplus (T \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z})$  から  $T \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} = 0$  を得る。

$T$  は  $\mathbb{Z}/p^e\mathbb{Z}$ ,  $e > 0$  の形の集まりなので ([4], 第 4 章定理 15)、 $T$  に  $\mathbb{Z}/p^e\mathbb{Z}$  があれば、[1], Exercise 2.2 より

$$(\mathbb{Z}/p^e\mathbb{Z}) \otimes (\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}) = (\mathbb{Z}/p\mathbb{Z})/(p^e(\mathbb{Z}/p\mathbb{Z})) = (\mathbb{Z}/p\mathbb{Z})/0 = \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} \quad (12)$$

となり、 $T \otimes \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$  は非零になってしまう。

従って、 $T$  が非零とすれば、 $\mathbb{Z}/2^e\mathbb{Z}$  のみが存在しており、このとき式 (11) に右から  $\otimes \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  をとると、式 (12) と同様  $(\mathbb{Z}/2^e\mathbb{Z}) \otimes (\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}) = \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  なので、次の exact 系列を得る。

$$\mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \xrightarrow{\iota''} \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \xrightarrow{\sigma} \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \rightarrow 0$$

式 (11) において、 $1 \mapsto Q.H = 2Y_0$  であったが、 $\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  と tensor を取ると 0 となるので、 $\text{im} \iota'' = 0$  である。すると、 $\ker \sigma = 0$  から  $\sigma$  は単射となり、全射でもあるので、同型になる:

$$\mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \xrightarrow{\cong} \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$$

これは矛盾なので、 $T = 0$  であり、 $\text{Cl } Q = \mathbb{Z}$  を得る。

下図式に示す通り、左下の  $\mathbb{Z}$  から右下  $\mathbb{Z}$  への写像は下の写像に等しいので、 $1 \approx H \mapsto Q.H \approx 2$  となり、単位元 ( $\mathbb{Z}$  の単位元 1 に対応する  $\text{Cl } Q$  の単位元) の 2 倍になっている。 $Q.H = 2Y_0$  だったので、 $\text{Cl } Q$  の単位元は  $Y_0 (= Y_1)$  である。

$$\begin{array}{ccc} \text{Cl } \mathbf{P}^n & \xrightarrow{H \mapsto Q.H} & \text{Cl } Q \\ \approx \downarrow & & \downarrow \approx \\ \mathbb{Z} & \xrightarrow{1 \mapsto \deg Q=2} & \mathbb{Z} \end{array}$$

(2)  $r = 3$ :  $n$  に関する数学的帰納法で証明する。

$n = r$  の場合、Example 6.6.1 より  $\text{Cl } Q = \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}$  である。

$\mathbf{P}^n$  に対して  $\text{Cl } Q' = \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}$  とする。 $\mathbf{P}^{n+1}$  における  $Q = V((f))$  は Exercise 6.3 における  $\bar{X}$  に相当する:  $Q = \bar{X}$

$$\bar{X} - P = \pi^{-1}(Q') \stackrel{\text{Eq. (6)}}{=} Q' \times \mathbf{A}^1$$

より

$$\text{Cl } Q = \text{Cl } \bar{X} \stackrel{\text{Prop. 6.5(b)}}{=} \text{Cl } (\bar{X} - P) = \text{Cl } (Q' \times \mathbf{A}^1) = \text{Cl } Q' = \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}$$

を得る。

(3)  $r \geq 4$ : 式 (8) において、(b)(3) の  $\text{Cl } X = 0$  から

$$0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\iota} \text{Cl } Q \rightarrow 0, 1 \xrightarrow{\iota} Q.H$$

より  $\mathbb{Z} \approx \text{Cl } Q$  なので、 $\mathbb{Z}$  の単位元 1 の像は  $\text{Cl } Q$  の単位元となり、 $\text{Cl } Q$  は  $Q.H$  で生成される。

(d)

$Q = V((f))$  における codim 1 の既約 subvariety を  $Y = V(\mathfrak{p})$  とする。

$S(Q) = k[x_0, \dots, x_n]/(f)$  は projectively normal ( $S(Q)$  が整閉) で、今示した (3) から  $\text{Cl } Q \approx \mathbb{Z}$  は  $Q.H$  で生成されるので、Exercise II.6.3(c) より、 $S(Q)$  は ufd である。

すると、Proposition I.1.12A から高さ 1 の prime ideal は principal となる ( $S(Q)$  にて)。従って、 $k[x_0, \dots, x_n]$  においては  $\mathfrak{p} = (g, f)$ ,  $g$ : irreducible とかけ、complete intersection である。

ここで  $V = V((g))$  とおくと  $Y = V((g, f)) = V((g)) \cap V((f)) = V \cap Q$  となり、 $Y$  は  $Q$  の prime divisor で

$$V.Q = v_Y(g)Y$$

を満たす。

このとき、 $i(Q, V; Y) = v_Y(g) = 1$  である。なぜなら、 $Y = \{\mathfrak{p}\}^-$  に対して  $\mathcal{O}_{Q, \mathfrak{p}} = S(Q)_{\mathfrak{p}}$  の極大 ideal は  $\mathfrak{m} = \mathfrak{p}/(f)$  であり、 $r = v_Y(g)$  は  $(g) = \mathfrak{m}^r = ((g, f)/(f))^r$  を満たす  $r$  ゆえ、 $r = 1$  だからである。なお、complete intersection なら同様にして multiplicity は 1 となる。

## 2.6.6

(a) Example 6.10.2 より

$$\text{Cl}^\circ X \approx X^V := \{\text{group variety of } X\}$$

である。これには二つの意味があり、(i)  $\deg D = 0$  の divisor には  $X^V$  の元 (closed point) が対応する、(ii) principal divisor は  $X^V$  の零点  $0 := P_0$  が対応する。

従って、 $\text{Cl}^\circ X$  に属する  $\text{Cl}^\circ X \ni P+Q+R-3P_0 \mapsto P+Q+R-3 \cdot 0 = P+Q+R$  であり、 $P, Q, R$ : collinear  $\Leftrightarrow (l/z) = P+Q+R-3P_0 \Leftrightarrow P+Q+R-3 \cdot 0 = 0 \Leftrightarrow P+Q+R=0$  が成り立つ。

(b)  $P \neq P_0$  とする。 $P$  における tangent line  $L = V((l))$  が  $P_0$  を通るとき、その principal divisor は  $(l/z) = P + P + P_0 - 3P_0$  である。(a) より、 $(l/z) = P + P + P_0 - 3P_0 \Leftrightarrow P + P = 2 \cdot 0 \Leftrightarrow 2P = 0 \Leftrightarrow \text{order}(P) = 2$

(c) 任意の line  $L = V((l))$  に対し、 $\deg L.Y = \deg L \deg Y = 3$  より、 $\sum_P i(L, Y; P) = 3$  である。このとき、

$$3P = 0 \Leftrightarrow 3P - 3P_0 = (l/z) \Leftrightarrow i(L, X; P) = v_P(l/z) = 3$$

より、 $\text{order}(P) = 3 \Leftrightarrow P$ : inflection point である。

(d) 座標成分が  $\mathbf{Q}$  に属す  $X^V$  の点の集合を  $E(\mathbf{Q})$  とする。

$P_0 = (0, 1, 0) \in E(\mathbf{Q})$  であり、 $P, Q \in E(\mathbf{Q})$  に対し、それらを通る直線  $L$  と  $X$  の交点を  $P, Q, R$  とすると、 $L$  を与える式  $ax + by + cz = 0$  の係数は  $\mathbf{Q}$  に属すので、 $ax + by + cz = 0$ ,  $y^2z - x^3 + xz^2 = 0$  の解としての  $R$  の座標成分は、解と係数の関係から  $\mathbf{Q}$  に属し、よって  $R \in E(\mathbf{Q})$  となる。 $R$  の具体的な求め方は省略するが、例えば [3], 2.2 The Group Law を参照のこと。

Mordell-Weil Theorem([3], Theorem 8.17) より  $E(\mathbf{Q})$  は有限生成加法群であるが、特に本問のケースでは次の通りである。

$$E(\mathbf{Q}) = \{(0, 0, 1), (0, 1, 0), (1, 0, 1), (-1, 0, 1)\}$$

( $\therefore$ ) 次に示す性質 4 から、 $y^2z = x^3 - xz^2 \Rightarrow 4x^4 + y^4 = (2xz + y^2)^2$  を満たす有理数  $x, y, z$  において、 $x, y$  のいずれかは 0 である。よって、 $E(\mathbf{Q})$  は上記 4 点だけになる。

$P_1 = (0, 0, 1), P_2 = (1, 0, 1), P_3 = (-1, 0, 1)$  とすると  $x = 0, x = z, x = -z$  がそれぞれ  $P_1, P_2, P_3$  を通り、かつ、例えば line  $x = 0$  は  $P_1, P_0$  を通り  $v_{P_1}(x) = 2$  なので<sup>7</sup>、(b) より  $P_1$  の位数は 2 である (楕円曲線での計算でも導出できる)。 $P_2 = (1, 0, 1), P_3 = (-1, 0, 1)$  についても同様である。すると、 $P_1 + P_2 = P_3$  となる。

従って  $E(\mathbf{Q}) = \{P_0, P_1\} \times \{P_0, P_2\} \approx \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \times \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  である。(  $\therefore$  終 )

以下 2 つの性質は <https://math.stackexchange.com/questions/1786448/rational-solutions-of-y2-x3-x> を参考にした。

性質 3. 非零整数  $x, y, z$  が

$$x^2 + y^2 = z^2, \gcd(x, y) = 1$$

を満たすとすると。このとき、 $x, y$  の一方は奇数で他方は偶数であり、 $x$  を偶数とすると、 $x, y, z$  は整数  $a, b, c$  より

$$x = 2ab, y = b^2 - a^2, z = a^2 + b^2, 0 < a < b, \gcd(a, b) = 1, y, a + b : \text{odd}$$

とかける。

(証明) 偶数  $x$  を  $x = 2k$  とおく。 $y, z$  はともに奇数であり、

$$4k^2 = z^2 - y^2 \Rightarrow k^2 = \frac{z+y}{2} \frac{z-y}{2}$$

ここで、 $y, z$  は coprime なので  $\frac{z+y}{2}, \frac{z-y}{2}$  も coprime、よって  $\frac{z+y}{2}, \frac{z-y}{2}$  とも平方数となり  $\frac{z-y}{2} = a^2, \frac{z+y}{2} = b^2$  とおける。よって

$$x = 2ab, y = b^2 - a^2, z = a^2 + b^2, 0 < a < b, \gcd(a, b) = 1, a + b : \text{odd number}$$

となる。(証明終)

<sup>7</sup> $H = V((x))$  とすると  $\mathcal{O}_{P_1}$  の max ideal  $\mathfrak{m} = (x, y)$  に対し、 $x \in \mathfrak{m}^2 = (x^2, xy, y^2) = (x^2, xy, x) = (x)$  であり、 $x \notin \mathfrak{m}^r, r \geq 3$  なので、 $v_P(x) = 2$  が得られる。



性質 4.  $x^4 + 4y^4 = z^2$  を満たす有理数  $x, y, z$  は  $xy = 0$  を満たす。

(証明) まず、 $x^4 + 4y^4 = z^2$  を満たす非零整数  $x, y, z$  が存在しないことを示す。仮に、存在したとしよう。このとき、 $p^4 + 4q^4 = r^2$ ,  $0 < r < z$  となる非零整数  $p, q, r$  が存在することを示す (Fermat's method of decent)。これが示されれば、結局  $r = 1$  となり、矛盾をきたすことになる。

$x, y$  が coprime でないとすると、その公約数  $d$  で  $z$  が割り切れるので  $r = z/d$  とすればよい。 $x, y$  が coprime のとき、 $(x^2)^2 + (2y^2)^2 = z^2$  から性質 3 より

$$2y^2 = 2ab, x^2 = b^2 - a^2, z = a^2 + b^2, 0 < a < b, \gcd(a, b) = 1, x : \text{odd}$$

となる。 $a, b$  が coprime なので、 $y^2 = ab$  から  $a = c^2, b = d^2$ ,  $\gcd(c, d) = 1$  とかけ、 $x^2 = d^4 - c^4 \Rightarrow x^2 + c^4 = d^4$  を得る。 $x^2 + (c^2)^2 = (d^2)^2$ ,  $x : \text{odd}$  より、性質 3 から

$$c^2 = 2ef, x = f^2 - e^2, d^2 = e^2 + f^2, \gcd(e, f) = 1$$

となる。 $e, f$  が coprime なので  $c^2 = 2ef$  より  $e, f$  の片方が平方数、残りが平方数の 2 倍となる。よってそれらを  $p^2, 2q^2$  とおくと、 $d^2 = e^2 + f^2 \Rightarrow p^4 + 4q^4 = d^2$  となる。ここで、 $d < d^2 = b < z$  なので、 $r = d$  とすればよい。

次に、 $x = x_1/x_0, y = y_1/y_0, z = z_1/z_0, x_i, y_i, z_i : \text{integer}$  が非零で、 $x^4 + 4y^4 = z^2$  を満たすとすると、 $(y_0 z_0 x_1)^4 + 4(x_0 z_0 y_1)^4 = (x_0^2 y_0^2 z_0 z_1)^2$  が得られる。すると、既に得られた結果から  $x_1, y_1, z_1$  が全て非零ではあり得ないので、 $x, y, z$  も非零ではあり得ない。このとき、 $x, y$  のいずれかは 0 である。(証明終)

## 2.6.7

Nodal cubic curve  $X = V((f))$ ,  $f = y^2 = x^3 + x^2z$  は rational であるが (Exercise I.4.4(c)),  $Z = (0, 0, 1)$  は singular point である。実際、 $Z$  において  $\frac{\partial f}{\partial x} = 0, \frac{\partial f}{\partial y} = 0, \frac{\partial f}{\partial z} = 0$  となる。

Example 6.11.4 と同様、 $X - Z \xrightarrow{\sim} \text{CaCl}^\circ X$  が成り立つ。

$X - Z$  が multiplicative group  $G_m$  と同型になることを示す。そのために

$$k^\times \xrightarrow{\sim} X - Z$$

$$t \mapsto (4t(t-1), 4t(t+1), (t-1)^3)$$

$$X - Z \xrightarrow{\sim} k^\times$$

$$(x, y, z) \mapsto \frac{y+x}{y-x}$$

となる 1 対 1 対応を考えると  $(4t(t-1), 4t(t+1), (t-1)^3)$  は  $y^2z = x^3 + x^2z$  を満たしており、 $t = 0, 1$  はそれぞれ  $Z, P_0$  に対応している。

$P_i := (x_i, y_i, z_i) = (4t_i(t_i-1), 4t_i(t_i+1), (t_i-1)^3)$ ,  $i = 1, 2, 3$  を直線  $L$  と  $X$  の 3 交点とする ( $X - Z$  において)。  $L$  を  $ax + by + cz = 0$  とすると、それら 3 交点は

$$4t(t-1)a + 4t(t+1)b + (t-1)^3c = 0$$

の解であり、解と係数の関係から

$$t_1 t_2 t_3 = 1$$

を得る。

$P = P_1 + P_2$  とすると、 $P_0, P_3, P$  を通る直線が存在するので、 $P$  に対応する  $t$  は同様に  $t_0 t_3 t = 1$ ,  $t_0 = 1 \Rightarrow t = t_3^{-1}$  を満たすので、

$$t = t_1 t_2$$

が成り立つ。なお、 $t = t_3^{-1}$  は  $P = -P_3$  に対応してるので、逆元は  $t$  の逆数に対応する。

よって  $X - Z$  は multiplicative group  $k^\times = \mathbf{A}_k^1 - (0)$  と同型になる (definition, p. 136 より、curve 上では  $k$  は代数的閉体の前提あり)。

### 2.6.8

(a)  $f : X \rightarrow Y$ ,  $\mathcal{L} \in \text{Pic } X$  のとき、 $\mathcal{L}|_{V_i} = \mathcal{O}_{Y|V_i}$ ,  $Y = \cup_i V_i$  なので

$$(f^* \mathcal{L})|_{U_i} = \bar{f}^*(\mathcal{L}|_{V_i}) = \bar{f}^*(\mathcal{O}_{V_i}) = \mathcal{O}_{U_i}, \bar{f} = f|_{U_i} : U_i \rightarrow V_i, U_i = f^{-1}(V_i)$$

が成り立ち (Exercise II.5.1 解答中の性質 4)、 $f^* \mathcal{L}$  は invertible である。

(b) Nonsingular curve  $X, Y$  は Proposition 6.11、Corollary 6.16 の前提を満たすので (Remark 6.11.1A)、 $\text{Cl } X \cong \text{CaCl } X \cong \text{Pic } X$  であり、 $Y$  に関しても同様である。

$f : X \rightarrow Y$  が finite なので

$$f^{*c} : \text{Cl } Y \rightarrow \text{Cl } X$$

が存在する (Definition, p.137 の最後)。

また  $X$  は complete であり (次の性質 5)、Proposition 6.8 が適用できる。ここで、もし、 $f(X) = pt$  とすると  $X = f^{-1}(pt)$  は有限である (Exercise II.3.5(a))。Exercise I.4.8 から  $X$  の closed point 集合は  $k$  と同じ濃度をもつが、 $k$  は代数的閉体なので無限、矛盾である。

従って  $f$  は全射であり、 $f^\# : \mathcal{O}_Y \hookrightarrow f_* \mathcal{O}_X$  は単射となる。よって  $\mathcal{O}_Y(V) \hookrightarrow \mathcal{O}_X(U)$ ,  $U = f^{-1}(V) \Rightarrow K(Y) \subseteq K(X)$  である。

$$f^{*c} : \text{Cl } Y \rightarrow \text{Cl } X$$

$$Q \mapsto \sum_{f(P)=Q} v_P(t_Q)P, t_Q \in \mathcal{O}_Q \subseteq K(Y) \subseteq K(X) : \text{local parameter}$$

$$f^{*ca} : \text{CaCl } Y \rightarrow \text{CaCl } X, D = \{(V_i, g_i)\} \mapsto \{(U_i, g_i)\}$$

$$U_i = f^{-1}(V_i), g_i \in K(Y) \subseteq K(X)$$

$$f^{*p} : \text{Pic } Y \rightarrow \text{Pic } X, \mathcal{L}D \mapsto f^* \mathcal{L}D$$

とすると、これらに関する図式

$$\begin{array}{ccccc}
 \mathrm{Cl} Y & \xleftarrow{\sim \varphi^Y} & \mathrm{CaCl} Y & \xrightarrow{\sim \mathcal{L}^Y} & \mathrm{Pic} Y \\
 f^{*c} \downarrow & & \downarrow f^{*ca} & & \downarrow f^{*p} \\
 \mathrm{Cl} X & \xleftarrow{\sim \varphi^X} & \mathrm{CaCl} X & \xrightarrow{\sim \mathcal{L}^X} & \mathrm{Pic} X
 \end{array} \tag{13}$$

が<sup>8</sup> local に ( $V_i = f^{-1}(U_i)$  において) 可換であることを示す<sup>8</sup>。

まず、図式の左側の区画において

$$f^{*ca} : D = \{(V_i, g_i)\} \mapsto \{(U_i, g_i)\}$$

$$\varphi^Y : \{(V_i, g_i)\} \rightarrow \sum_Q v_Q(g_j)Q$$

$$\varphi^X : \{(U_i, g_i)\} \rightarrow \sum_P v_P(g_j)P$$

が成り立つ。ここで、 $j$  は  $Q \in V_j [\Leftrightarrow P \in U_j]$  を満たすものである ( $j$  は  $Q \cap V_j \neq \emptyset$  となる  $j$  であり、そのような  $j$  ならどれを用いても結果は変わらない、Proposition 6.11 の証明参照)。

このとき、下記性質 6 より

$$\begin{aligned}
 f^{*c} : \sum_Q v_Q(g_j)Q &\rightarrow \sum_Q v_Q(g_i) \sum_{P \in f^{-1}(Q)} v_P(t_Q)P \\
 &= \sum_P v_{f(P)}(g_i) v_P(t_{f(P)})P = \sum_P v_P(g_i)P
 \end{aligned}$$

なので、 $f^{*c}\varphi^Y = \varphi^X f^{*ca}$ 、ゆえに可換となる。

次に図式の右側の区画が可換であることを示す。

$$\mathcal{L}^Y : D^Y = \{(V_i, g_i)\} \mapsto \mathcal{L}D^Y = \{\mathcal{O}_{V_i} g_i^{-1}\}$$

$$f^{*p} : \mathcal{L}D^Y \mapsto f^*(\mathcal{L}D^Y)$$

$$f^*(\mathcal{L}D^Y)|_{U_i} = \bar{f}^*((\mathcal{L}D^Y)|_{V_i}) = \bar{f}^*(\mathcal{O}_{V_i} g_i^{-1}) \stackrel{\#}{=} \mathcal{O}_{U_i} g_i^{-1}$$

$$f^{*ca} : D^Y = \{(V_i, g_i)\} \mapsto D^X = \{(U_i, g_i)\}$$

$$\mathcal{L}^X : D^X = \{(U_i, g_i)\} \mapsto \mathcal{L}D^X = \{\mathcal{O}_{U_i} g_i^{-1}\}$$

から  $f^{*p}\mathcal{L}^Y = \mathcal{L}^X f^{*ca}$ 、ゆえに可換となる。なお、 $\stackrel{\#}{=}$  が成立するのは次の性質 7 による。

<sup>8</sup>  $\mathrm{Cl} Y \rightarrow \mathrm{CaCl} Y$ ,  $Q \mapsto \{(U_Q, t_Q), (Y-Q, 1)\}$  から証明することも可能である。 $\{(U_Q, t_Q), (Y-Q, 1)\}$  が Cartier divisor となることは  $t_Q \in \mathcal{O}_Q^*$  から容易に示すことができ、また  $\{(U_Q, t_Q), (Y-Q, 1)\}$  から Weil divisor を作成すれば  $Q$  となることも容易にわかる。

以上により図式 (13) 全体が可換となる。 $\varphi^Y, \varphi^X$  は isomorphism なので、その逆写像を考えれば

$$\begin{array}{ccc} \text{Cl } Y & \xrightarrow{\sim} & \text{Pic } Y \\ f^{*c} \downarrow & & \downarrow f^{*p} \\ \text{Cl } X & \xrightarrow{\sim} & \text{Pic } X \end{array}$$

が可換、 $f^{*c}$  と  $f^{*p}$  は等価となる。

性質 5.  $f : X \rightarrow Y$  ( $X, Y : \text{curve}$ ) が finite ならば、 $X$  は complete である。

(証明)  $y \in V = \text{Spec } B \subseteq Y$ ,  $y = \mathfrak{p}$  とすると、 $k$  は代数的閉体ゆえ  $B/\mathfrak{m} = k$  であり ([1], Corollary 7.10)

$$k(y) = \mathcal{O}_y/\mathfrak{m}_y = B_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}_{\mathfrak{p}} = (B/\mathfrak{p})_{\mathfrak{p}} \hookrightarrow (B/\mathfrak{m})_{\mathfrak{p}} = k$$

から、 $\text{Spec } k \rightarrow Y$  となる (Exercise II.2.7)。

このとき  $X \times_Y k = X$  が成り立つ。なぜなら

$$\begin{array}{ccccc} & & X & & \\ & i \swarrow & \uparrow \alpha & \searrow \gamma & \\ X & \xleftarrow{\alpha} & Z & \xrightarrow{\beta} & \text{Spec } k \\ & \searrow f & & \swarrow & \\ & & Y & & \end{array}$$

が可換となり ( $\beta : Z \rightarrow X \rightarrow \text{Spec } k$  となるのは、definition, p. 78 による)、一意性も明らかなので、U.P. から成立するからである。

すると、proper 性の base change 不変性から  $\gamma$  も proper、よって  $X$  は complete となる。(証明終)

性質 6.  $f : X \rightarrow Y$  が finite ならば、 $t_Q \in \mathcal{O}_Q \subseteq K(Y)$  を local parameter として、次式が成立する。

$$v_P(g) = v_P(t_Q)v_Q(g), \quad g \in K(Y), \quad Q = f(P) \quad (14)$$

(証明) まず  $\mathcal{O}_Q \hookrightarrow \mathcal{O}_P$ ,  $Q = f(P)$  を示す。( $\because$ )  $f$  は全射なので  $f^\# : \mathcal{O}_Y \hookrightarrow f_*\mathcal{O}_X$  は単射である。 $f$  が finite ゆえ  $V_i = \text{Spec } B^i$ ,  $U_i = f^{-1}(V_i) = \text{Spec } A^i$  とできるので、

$$f^\#(V_i) : \mathcal{O}_Y(V_i) = B^i \hookrightarrow (f_*\mathcal{O}_X)(V_i) = \mathcal{O}_X(U_i) = A^i$$

より  $\varphi = f^\#(V_i)$  とすると、

$$\varphi : B^i \hookrightarrow A^i \Rightarrow B_{\varphi^{-1}\mathfrak{p}}^i \hookrightarrow A_{\mathfrak{p}}^i \Rightarrow \mathcal{O}_Q \hookrightarrow \mathcal{O}_P$$

となる。(証明終)

$\mathcal{O}_Q \subseteq \mathcal{O}_P$  において、 $\mathcal{O}_Q, \mathcal{O}_P$  の max ideal をそれぞれ  $\mathfrak{m}_Q, \mathfrak{m}_P$  とすると、 $\mathfrak{m}_Q = \mathfrak{m}_P \cap \mathcal{O}_Q \subseteq \mathfrak{m}_P$  が成り立つ。

$(t_Q) = \mathfrak{m}_Q = \mathfrak{m}_P^r$  より  $r = v_P(t_Q)$  であり、 $s = v_Q(g)$  とすると、 $(g) = \mathfrak{m}_Q^s = \mathfrak{m}_P^{rs}$  から、 $v_P(g) = rs = v_P(t_Q)v_Q(g)$  を得る。(証明終)

性質 7.  $B \hookrightarrow A, f : U = \text{Spec } A \rightarrow V = \text{Spec } B, g$  を  $A$ -module の元とすると

$$f^*(\mathcal{O}_V g) = \mathcal{O}_U g$$

(証明) Proposition II.5.2(e) と次の性質 8 から

$$f^*(\mathcal{O}_V g) = f^*(\widetilde{B}g) = (Bg \otimes_B A)^\sim = (B \otimes_B Ag)^\sim = \widetilde{A}g = \check{A}g = \mathcal{O}_U g$$

(証明終)

性質 8. 整域  $A, B, C$  に対し  $A \rightarrow B, A \rightarrow C$  かつ  $t \in \text{Frac } B \cap \text{Frac } C$  のとき

$$Bt \otimes_A C \approx B \otimes_A Ct$$

(証明) 下図式の U.P. による。

$$\begin{array}{ccc} Bt \times C & & \\ \alpha \downarrow & \searrow f & \\ B \times Ct & \xrightarrow{h} & P \\ \varphi \downarrow & \nearrow \psi & \\ B \otimes Ct & & \end{array}$$

ここで、

$$\alpha : (bt, c) \mapsto (b, ct)$$

$$h : (b, ct) \mapsto f(bt, c)$$

とすると、 $h\alpha = f$  が成り立つ。 $\psi$  は  $B \otimes Ct$  の U.P. から得られるもので、 $h = \psi\varphi$  を満たす。すると、 $f = \psi(\varphi\alpha)$  が成り立ち、また、このような  $\psi$  は一意なので、U.P. から  $Bt \otimes C = B \otimes Ct$  が成立する。(証明終)

(c)  $X$  は locally factorial integral closed scheme なので、 $\text{Cl } X \approx \text{CaCl } X$  である。

$$\begin{array}{ccccc} \text{Cl } \mathbf{P}^n & \xleftarrow{\sim \varphi^P} & \text{CaCl } \mathbf{P}^n & \xrightarrow{\sim \mathcal{L}^P} & \text{Pic } \mathbf{P}^n \\ f^{*c} \downarrow & & \downarrow f^{*ca} & & \downarrow f^{*p} \\ \text{Cl } X & \xleftarrow{\sim \varphi^X} & \text{CaCl } X & \xrightarrow{\sim \mathcal{L}^X} & \text{Pic } X \end{array} \quad (15)$$

$f : X \hookrightarrow \mathbf{P}^n$  に対し、(b) と同様に  $f^{*c}, f^{*ca}, f^{*p}$  が定義できる。ただし  $f^{*c}$  は  $f^{*c} : \text{Cl } \mathbf{P}^n \rightarrow \text{Cl } X, V \mapsto V.X$  である。

$H = (x_0) \not\subseteq X$  とすると ( $(x_i) \not\subseteq X$  となる  $i$  は存在する)、 $\text{Cl } \mathbf{P}^n \approx \text{CaCl } \mathbf{P}^n \approx \text{Pic } \mathbf{P}^n$  は  $H$  で生成されるので (Proposition 6.4)、上記 3 つの morphism が  $H$  において等価になればよい。

$$f^{*c} : H \mapsto H.X = \sum_Z v_Z(x_0/x_i)Z$$

$$f^{*ca} : D = \{(U_i, x_0/x_i)\} \mapsto D^X = \{(f^{-1}(U_i), x_0/x_i)\}, f^{-1}(U_i) = U_i \cap X$$

$$f^{*p} : \mathcal{L}D = \{(U_i, \mathcal{O}_{U_i}x_i/x_0)\} \rightarrow f^*\mathcal{L}D = \{(U_i \cap X, \mathcal{O}_{U_i \cap X}x_i/x_0)\}$$

最後の式は (b) と同様、性質 7 による。また、 $H = (x_0) \not\subseteq X \Leftrightarrow x_0 \notin I, X = V(I)$  より  $x_0/x_i \in K(X) = \text{Frac}(S/I)_{(0)}$  と見ることができ。

$H$  に対応する  $\text{CaCl } \mathbf{P}^n$  の元は  $D = \{(U_i, x_0/x_i)\}$  である ( $U_i = D_+(x_i)$ )。なぜなら、 $D$  から Weil divisor を作成すると  $\sum_V v_V(x_0/x_i)V$  となるが ( $i$  は  $V \cap U_i \neq \emptyset$  となる  $i$ )、 $V = V((g))$  となる  $g$  に対し ( $\mathbf{P}^n$  の divisor はこの形に限る、Exercise I.2.8)、 $x_0 \in (g)^r$  となるのは、 $g = x_0, r = 1$  に限るからである： $\varphi^P(D) = H$   
 $\varphi^X(D^X)$  については、 $Z \cap (U_i \cap X) \neq \emptyset \Leftrightarrow Z \cap U_i \neq \emptyset$  なので、

$$\sum_{Z[Z \cap (U_i \cap X) \neq \emptyset]} v_Z(x_0/x_i)Z = \sum_{Z[Z \cap U_i \neq \emptyset]} v_Z(x_0/x_i)Z = H.X$$

が成り立つ。

さらに、

$$\mathcal{L}^X(D^X) = \mathcal{L}^X(\{(U_i \cap X, x_0/x_i)\}) = \{(U_i \cap X, \mathcal{O}_{U_i \cap X}x_i/x_0)\} = f^*\mathcal{L}D$$

である。

以上により、図式 (15) は可換となる。

### 2.6.9

(a) Projective curve over  $k$  の  $X$  の normalization を  $\tilde{X}$  とする。

$$\pi : \tilde{X} \rightarrow X$$

$$X = \cup_i U_i, U_i = \text{Spec } A_i, \tilde{X} = \cup_i \tilde{U}_i, \tilde{U}_i = \text{Spec } \tilde{A}_i$$

Theorem II.4.9 から  $X$  は finite-type over  $k$  であり、よって  $\pi : \tilde{X} \rightarrow X$  は finite である (Exercise II.3.8)。また、Normalization の構成法からわかるように (Exercise II.3.8 の証明の最後の式 (18) 参照)、 $\pi|_{\tilde{U}_i} : \tilde{U}_i \rightarrow U_i, \tilde{U}_i = \pi^{-1}(U_i)$  である。

$A_i \hookrightarrow \tilde{A}_i$  が単射なので、local に  $\pi^\# : \mathcal{O}_{U_i} \hookrightarrow \pi_*(\mathcal{O}_{\tilde{U}_i})$  も単射であり (Exercise II.2.18(b))、よって  $\forall x \in X$  に対して、 $x \in \exists U_i$  とすると  $\pi_x^\# : \mathcal{O}_{U_i, x} \hookrightarrow (\pi_*\mathcal{O}_{\tilde{U}_i})_x$  も単射となる。よって全体として  $\pi^\# : \mathcal{O}_X \hookrightarrow \pi_*(\mathcal{O}_{\tilde{X}})$  は単射となり

$$\pi^\# : \mathcal{O}_X \hookrightarrow \pi_*(\mathcal{O}_{\tilde{X}})$$

すると

$$\begin{aligned} A_i \subseteq \tilde{A}_i \subseteq \text{Frac } A_i = K(X) &\Rightarrow K(X) = \text{Frac } A_i \subseteq \text{Frac } \tilde{A}_i \subseteq K(X) \\ &\Rightarrow K(\tilde{X}) = K(X) = K \end{aligned}$$

従って

$$\begin{aligned} \mathcal{O}_X &\hookrightarrow \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}} \hookrightarrow \mathcal{H} \\ &\Rightarrow \mathcal{O}_X^* \hookrightarrow \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* \hookrightarrow \mathcal{H}^* \end{aligned}$$

このとき  $\forall U \subseteq X$  に対して、 $\mathcal{O}_X^*(U) \hookrightarrow \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*(U) \hookrightarrow \mathcal{H}^*(U)$  から  $\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*(U) / \mathcal{O}_X^*(U) \hookrightarrow \mathcal{H}^*(U) / \mathcal{O}_X^*(U)$  が得られ<sup>9</sup>、presheaf として  $(\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^*)^- \hookrightarrow (\mathcal{H}^* / \mathcal{O}_X^*)^-$  が成り立つが、Exercise II.1.4 より sheaf 化しても単射となる：

$$\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^* \hookrightarrow \mathcal{H}^* / \mathcal{O}_X^*$$

Exercise II.1.6(a) から

$$0 \rightarrow \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^* \rightarrow \mathcal{H}^* / \mathcal{O}_X^* \rightarrow (\mathcal{H}^* / \mathcal{O}_X^*) / (\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^*) = \mathcal{H}^* / \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* \rightarrow 0 \quad (\text{exact}) \quad (16)$$

ここで、 $\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^*$  は quasi-coherent である。なぜなら  $\mathcal{O}_X^*|_{U_i} = A_i^{\sim}$ 、 $(\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*)|_{U_i} = \bar{\pi}_*(\mathcal{O}_{\tilde{U}_i}^*) = (\tilde{A}_i^{\sim})^{\sim}$  より<sup>10</sup> ( $\bar{\pi} = \pi|_{\tilde{U}_i}$ 、 $\tilde{A}$  は  $A$  の整閉包、 $( )^{\sim}$  は Definition, p.110 で定義されたもの)、 $\mathcal{O}_X^*$ 、 $\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*$  は quasi-coherent、よって

$$0 \rightarrow \mathcal{O}_X^* \xrightarrow{\iota} \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* \rightarrow \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^* \rightarrow 0$$

において (Exercise II.1.6(a))、 $\text{coker } \iota = \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^*$  は quasi-coherent となるからである (Proposition 5.7)。

よって式 (16) から

$$\Rightarrow 0 \rightarrow \Gamma(X, \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^*) \rightarrow \Gamma(X, \mathcal{H}^* / \mathcal{O}_X^*) \rightarrow \Gamma(X, \mathcal{H}^* / \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*) \rightarrow 0 \quad (\text{exact})$$

となり (Proposition 5.6)<sup>11</sup>、snake lemma より下記の可換図が得られる。

$$\begin{array}{ccccccc} \ker 0 = 0 & \longrightarrow & \ker \alpha = \Gamma(X, \mathcal{O}_X^*) = k^* & \xrightarrow{\sim} & \ker \beta = \Gamma(X, \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*) = k^* & & \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \\ 0 & \longrightarrow & \Gamma(X, \mathcal{H}^*) = K^* & \xrightarrow{\sim} & \Gamma(X, \mathcal{H}^*) = K^* & \longrightarrow & 0 \\ \downarrow & & \downarrow \alpha & & \downarrow \beta & & \\ 0 & \longrightarrow & \Gamma(X, \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^* / \mathcal{O}_X^*) & \longrightarrow & \Gamma(X, \mathcal{H}^* / \mathcal{O}_X^*) & \longrightarrow & 0 \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \\ \text{coker } 0 & \longrightarrow & \text{coker } \alpha = \text{Pic } X & \xrightarrow{\gamma} & \text{coker } \beta = \text{Pic } \tilde{X} & \longrightarrow & 0 \end{array}$$

<sup>9</sup>ここでの剰余類は積に関する剰余類である。

<sup>10</sup>Exercise II.5.1 の証明の中の性質 4 参照

<sup>11</sup>Proposition 5.6 が使えるのは  $X$  が affine の場合であるが、exact 系列性は局所的性質なので  $X$  が affine のときに言えば十分である (Exercise I.1.2(c))。

可換図において、 $\alpha' : \mathcal{K}^* \rightarrow \mathcal{K}^*/\mathcal{O}_X^*$  とすると、 $\ker \alpha' = \mathcal{O}_X^* \Rightarrow \ker \alpha = \ker \alpha'(X) = \mathcal{O}_X^*(X) [= k^*]$  である (Theorem I.3.4(a)  $\leftarrow X$ : projective curve ゆえ variety と見做せる)。

$\text{CaDvi } X = \Gamma(X, \mathcal{K}^*/\mathcal{O}_X^*)$  であり、 $\text{im } \alpha$  は  $X$  の principal divisor なので、 $\text{Pic } X = \text{CaCl } X = \text{coker } \alpha$  となる。 $\beta$  についても同様である。

左下は  $\text{coker } 0 = \Gamma(X, \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*/\mathcal{O}_X^*)$  である。

$\ker \alpha \approx \ker \beta = k^*$  なので  $\delta = 0$  であり ([2], 例 1.8)、従って  $(\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*/\mathcal{O}_X^*)(X) \hookrightarrow \text{Pic } X$  は単射である。

$\mathcal{I} = \pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*/\mathcal{O}_X^*$  とすると、nonsingular point  $P$  では  $\mathcal{I}_P = 0$ 、 $X$  における singular point の集合は閉集合 ( $\subseteq X$ ) であり (Theorem I.5.3)、 $\text{Supp } \mathcal{I} \subsetneq X$  ゆえ、次の性質 9 から

$$\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*/\mathcal{O}_X^* = \bigoplus_{P \in X} (\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*)_P / (\mathcal{O}_X^*)_P = \bigoplus_{P \in X} \tilde{\mathcal{O}}_P^*/\mathcal{O}_P^*$$

となる。ここで、最後の等号は  $(\pi_* \mathcal{O}_{\tilde{X}}^*)|_{U_i} = \tilde{\pi}_*(\mathcal{O}_{\tilde{U}_i}) = (\tilde{A}_i)^\sim$  より、Proposition 5.1(b) から

$$(\tilde{\pi}_* \mathcal{O}_{\tilde{U}_i}^*)_P = (\tilde{A}_i^*)_P \stackrel{\%}{=} (\widetilde{A_i^*})_P = \widetilde{\mathcal{O}_{U_i, P}^*} = \tilde{\mathcal{O}}_P^*$$

となるからである ( $\stackrel{\%}{=}$  は [1], Proposition 5.12 による)。

以上まとめると次の exact 系列を得る。

$$0 \rightarrow \bigoplus_{P \in X} \tilde{\mathcal{O}}_P^*/\mathcal{O}_P^* \rightarrow \text{Pic } X \rightarrow \text{Pic } \tilde{X} \rightarrow 0 \quad (17)$$

性質 9. Curve  $X$ 、coherent sheaf  $\mathcal{F}$  において  $\text{Supp } \mathcal{F} \subsetneq X$  のとき

$$\mathcal{F} = \bigoplus_{P \in X} i_P(\mathcal{F}_P) = \bigoplus_{P \in X} \mathcal{F}_P$$

(証明) Curve  $X$  は noetherian なので、Exercise II.5.6 より  $\text{Supp } \mathcal{F}$  は閉集合であり、有限個の closed point からなる。すると  $\mathcal{F} \rightarrow i_P(\mathcal{F}_P)$  を定義できる。なぜなら

$$\mathcal{F}(U) \rightarrow i_P(\mathcal{F}_P)(U) = \begin{cases} \mathcal{F}_P & : P \in U \\ 0 & : \text{otherwise} \end{cases}$$

が存在し、これは制限写像と compatible だからである。よって

$$f : \mathcal{F} \rightarrow \bigoplus_{P \in \text{Supp } \mathcal{F}} i_P(\mathcal{F}_P) = \bigoplus_{P \in X} i_P(\mathcal{F}_P)$$

が定義できる。

このとき

$$\left( \bigoplus_{P \in X} i_P(\mathcal{F}_P) \right)_Q = \begin{cases} \mathcal{F}_P & : Q = P \in \text{Supp } \mathcal{F} \\ 0 & : Q \notin \text{Supp } \mathcal{F} \end{cases}$$



より  $\mathcal{F}_Q = (\bigoplus_{P \in X} i_P(\mathcal{F}_P))_Q$  となるので、 $\mathcal{F} = \bigoplus_{P \in X} i_P(\mathcal{F}_P)$  が得られる。 $X$  が curve の場合、 $\{P\}^- = P$  から、 $i_P(\mathcal{F}_P) = \mathcal{F}_P$  と見られる。(証明終)

(b)

(b-1) Cuspidal curve:  $y^2z = x^3$

$X = D_+(z) \cup D_+(y)$  の singular point は  $Z = (0, 0, 1) \in D_+(z)$ 、 $z = 0$  の点 は  $P_0 = (0, 1, 0) \in D_+(y)$  である。

$D_+(z)$  では、 $D_+(z) = X - P_0 = \text{Spec } A$ 、 $A := k[x, y]/(y^2 - x^3)$  とすると  $\text{Frac } A = k(x, y)[y]/(y^2 - x^3)$  であり、

$$\alpha : A \hookrightarrow k[t], \quad x \mapsto t^2, y \mapsto t^3$$

$$\beta : k[t] \hookrightarrow \text{Frac } A, \quad t \mapsto y/x$$

は単射となる。なぜなら、 $\alpha$  は  $f = \sum_{i,j \geq 0} a_{i,j} x^i y^j$  のとき  $f(t^2, t^3) = \sum_{i,j \geq 0} a_{i,j} t^{2i+3j} = 0$  において低次係数から順次 0 となることからであり、 $\beta$  においては  $y^2 = x^3$  を満たす  $y/x$  は任意の値を取りうるので  $g(y/x) = 0$  なら多項式として  $g = 0$  となるからである。なお  $A \approx \text{im } \alpha = k[t^2, t^3]$  である。

$A$  の整閉包は  $\tilde{A} = k[t]$  であることを示す。まず  $k[t]$  は整閉である。 $\beta : k[t] \subseteq \text{Frac } A$  では  $t = y/x$  であるが、 $t^2 - x = 0$  より  $t$  は  $A$  上整ゆえ  $k[t] \subseteq \tilde{A}$  となる。一方  $A \subseteq k[t] \subseteq \text{Frac } A$  から  $\tilde{A} \subseteq k[t] = A$  なので、合わせて  $\tilde{A} = k[t]$  を得る。

$D_+(y)$  では、 $D_+(y) = X - Z = \text{Spec } B$ 、 $B = k[x, z]/(z - x^3) = k[t]$ 、 $t = x$  において、 $\tilde{B} = k[t]$  となる。

以上により  $\tilde{X} = \mathbf{P}_k^1$  となり、 $\text{Pic } \tilde{X} = \mathbb{Z}$  が得られる。

$X - Z$  は nonsingular なので  $\mathcal{O}_P$  は整閉、 $\tilde{\mathcal{O}}_P = \mathcal{O}_P$  となる。

$$\tilde{\mathcal{O}}_Z^*/\mathcal{O}_Z^* = S^{-1}k[t]^*/S^{-1}k[t^2, t^3]^* = \left\{ \frac{a + bt + t^2 f}{1 + t^2 g} \right\}_{a \in k^*, b \in k, f, g \in k[t]}$$

$$S = \alpha(A \setminus (x, y)) = k[t^2, t^3] \setminus (t^2) = \{1 + t^2 g\}_{g \in k[t]}$$

ここで、 $a \neq 0$  である。なぜなら、 $\frac{a+bt+t^2f}{1+t^2g}$  は unit であるが、もし  $a = 0$  とすると  $\frac{bt+t^2f}{1+t^2g} \cdot \frac{a'+b't+t^2f'}{1+t^2g'} = 1$  となり得ないからである。

$$\theta : \tilde{\mathcal{O}}_Z^*/\mathcal{O}_Z^* \rightarrow \mathbf{G}_a, \quad \frac{a + bt + t^2 f}{1 + t^2 g} \mapsto b/a$$

とする。 $\theta$  は同型である。実際、 $\frac{a+bt+t^2f}{1+t^2g} = \frac{a'+t^2f'}{1+t^2g'} \in S^{-1}k[t^2, t^3]^*$  とすると  $b = 0$  となり well-define である。逆に  $b = 0$  とすると  $\frac{a+t^2f}{1+t^2g} \in S^{-1}k[t^2, t^3]^*$  から単射である。全射は自明であり、さらに  $\frac{a+bt+t^2f}{1+t^2g} \cdot \frac{a'+b't+t^2f'}{1+t^2g'} = \frac{aa'+(ab'+a'b)t+t^2f''}{1+t^2g''} \mapsto (ab' + a'b)/aa' = b/a + b'/a'$  より準同型でもある。よって  $\bigoplus_{P \in X} \tilde{\mathcal{O}}_P^*/\mathcal{O}_P^* = \tilde{\mathcal{O}}_Z^*/\mathcal{O}_Z^* = \mathbf{G}_a$  となる。

以上により式 (17) から

$$0 \rightarrow \mathbf{G}_a \rightarrow \text{Pic } X \rightarrow \mathbb{Z} \rightarrow 0$$

が得られる。

(b-2) Nodal curve:  $y^2z = x^3 + x^2z$

$D_+(z) = X - P_0 = \text{Spec } A$ ,  $A = k[x, y]/(y^2 - x^3 - x^2)$  は  $P_0 = (0, 1, 0)$  を含まないが、 $y \rightarrow \infty$  とすれば  $P_0$  となるので、ここではそれを含め  $X$  を  $\text{Spec } A$  として扱う。

$\text{Frac } A = k(x)[y]/(y^2 - x^3 - x^2)$  に対し、

$$\alpha : A \hookrightarrow k[t], \quad x \mapsto t^2 - 1, y \mapsto t^3 - t$$

$$\beta : k[t] \hookrightarrow \text{Frac } A, \quad t \mapsto y/x$$

は単射となる ((b-1) と同様)。なお、 $P_0$  は  $t = \infty$  に対応する。

$\tilde{A} = k[t]$  となることも (b-1) と同様であり、よって  $\tilde{X} = \mathbf{P}_k^1$  である。

$X$  において  $Z$  以外は nonsingular なので、やはり (b-1) 同様  $\tilde{\mathcal{O}}_P^* = \mathcal{O}_P^*$  が成り立つ。

$Z$  は  $A$  の prime ideal  $(x, y)$  に対応しており、

$$S = \alpha(A \setminus (x, y)) = k[t^2 - 1, t^3 - t] \setminus (t^2 - 1) = \{1 + (t^2 - 1)g\}_{g \in k[t]}$$

から

$$\tilde{\mathcal{O}}_Z^*/\mathcal{O}_Z^* = S^{-1}k[t]^*/S^{-1}k[t^2-1, t(t^2-1)]^* = \left\{ \frac{a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)f}{1 + (t^2-1)g} \right\}_{a, b \in k^*, f, g \in k[t]}$$

となる。ここで  $\forall f(t) \in k[t]$  は  $f(t) = a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)g$  と書けるが、もし  $a = 0$  だと  $\frac{b(t-1) + (t^2-1)f}{1 + (t^2-1)g} = \frac{h}{1 + (t^2-1)g'}$  はあり得ないので ( $t = 1$  とすればわかる)、 $a \neq 0$  であり、 $b \neq 0$  も同様である<sup>12</sup>。

$$\theta : \tilde{\mathcal{O}}_Z^*/\mathcal{O}_Z^* \rightarrow k^*, \quad \frac{a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)f}{1 + (t^2-1)g} \mapsto -a/b$$

と定義する。実際に定義できるのは、 $\frac{a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)f}{1 + (t^2-1)g} \in S^{-1}(k[t^2-1, t^3-t])$  なら  $a + b = 0 \Rightarrow -a/b = 1$  による。 $\theta$  が単射となるのは、 $-a/b = 1$  とすると  $a + b = 0$  より

$$\frac{a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)f}{1 + (t^2-1)g} = \frac{2a + (t^2-1)f}{1 + (t^2-1)g} \in S^{-1}k[t^2-1, t(t^2-1)]^* = \mathcal{O}_Z^*$$

だからである。全射は自明であり、さらに

$$\begin{aligned} & (a(t+1) + b(t-1))(a'(t+1) + b'(t-1)) = 2aa'(t+1) - 2bb'(t-1) + (t^2-1)g'' \\ \Rightarrow \theta(hh') &= \frac{aa'}{bb'} = \theta h \cdot \theta h', \quad h := \frac{a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)f}{1 + (t^2-1)g}, \quad h' := \frac{a'(t+1) + b'(t-1) + (t^2-1)f'}{1 + (t^2-1)g'} \end{aligned}$$

<sup>12</sup>ここでは不要だが、逆に  $a \neq 0, b \neq 0$  なら  $a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)g$  は unit となる。実際、 $(a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)g)(a^{-1}/4(t+1) + b^{-1}/4(t-1)) = 1 + (t^2-1)g' \in S$  より、 $a(t+1) + b(t-1) + (t^2-1)g$  は単元である。

から準同型でもあるので、

$$\tilde{\mathcal{O}}_Z^*/\mathcal{O}_Z^* \xrightarrow{\sim} \mathbf{G}_m$$

が成り立つ。

以上により式 (17) は

$$0 \rightarrow \mathbf{G}_m \rightarrow \text{Pic } X \rightarrow \mathbb{Z} \rightarrow 0$$

となる。

### 2.6.10

$$\mathfrak{C} = \{[\mathcal{F}] \mid \mathcal{F} : \text{coherent}\}, \quad \mathfrak{D} = \{[\mathcal{F}] - [\mathcal{F}'] - [\mathcal{F}''] \mid 0 \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{F}'' \rightarrow 0\}$$

このとき、 $\gamma$  を

$$\gamma\mathcal{F} = [\widetilde{\mathcal{F}}] \in \mathfrak{C}/\mathfrak{D} = K(X)$$

で定義する。

$\mathfrak{C}$  は free abelian group なので、その元の表現は一意的である。以下  $\mathfrak{C}$  において、 $[\mathcal{F}]$  を単に  $\mathcal{F}$  と記す。

$$\begin{aligned} 0 \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{F}'' \rightarrow 0 \\ \Leftrightarrow \mathcal{F} - \mathcal{F}' - \mathcal{F}'' \in \mathfrak{D} \\ \Leftrightarrow \widetilde{\mathcal{F}} - \widetilde{\mathcal{F}'} - \widetilde{\mathcal{F}''} = 0 \\ \Leftrightarrow \gamma\mathcal{F} - \gamma\mathcal{F}' - \gamma\mathcal{F}'' = 0 \quad [:= \gamma 0] \end{aligned}$$

従って、

$$\gamma\mathcal{F} = \gamma\mathcal{F}', \quad \gamma\mathcal{F} = \gamma\mathcal{F}' + \gamma 0 \Rightarrow 0 \rightarrow \gamma 0 \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow 0 \Rightarrow \mathcal{F} = \mathcal{F}' \quad (18)$$

さらに、

$$0 \rightarrow \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{O}_X^{\otimes n} \rightarrow \mathcal{O}_X^{\otimes n-1} \rightarrow 0 \quad (\text{exact})$$

より  $\gamma\mathcal{O}_X^{\otimes n} = \gamma\mathcal{O}_X^{\otimes n-1} + \gamma\mathcal{O}_X$  が成り立つので、 $\gamma\mathcal{O}_X^{\otimes n} = n\gamma\mathcal{O}_X$  である。

(a)  $\mathcal{F} = \tilde{M}$ : 有限生成  $k[x]$ -module における  $M$  の生成元を  $x_1, \dots, x_n$  とすると

$$k[x]^{\otimes n} \twoheadrightarrow M, \quad (a_1, \dots, a_n) \mapsto \sum_i a_i x_i$$

が存在するので

$$0 \rightarrow \ker \varphi \rightarrow k[x]^{\otimes n} \xrightarrow{\psi} M \rightarrow 0 \quad (\text{exact})$$

ここで  $\ker \psi$  は、pid  $k[x]$  上の free module  $k[x]^{\otimes n}$  の部分加群なので、ねじれ部分をもたず、 $k[x]^{\otimes r}$  の形をしている (module の構造定理)。従って

$$0 \rightarrow k[x]^{\otimes r} \rightarrow k[x]^{\otimes n} \rightarrow M \rightarrow 0 \quad (\text{exact})$$

が成り立ち、

$$M = k[x]^{\otimes n-r} \Rightarrow \mathcal{F} = \tilde{M} = \widehat{k[x]^{n-r}} = \mathcal{O}_X^{n-r}$$

から  $\gamma(\mathcal{F}) = (n-r)\gamma(\mathcal{O}_X)$  を得る。これは  $\gamma(\mathcal{O}_X)$  が  $K(X)$  の生成元であることを示している。

$$\varphi : K(X) \rightarrow \mathbb{Z}, \gamma(\mathcal{F}) \mapsto n-r$$

は式 (18 から) 単射であり、 $\gamma\mathcal{O}_X^{\otimes n} = n\gamma\mathcal{O}_X$  より全射でもある。  
以上により  $K(X) = \mathbb{Z}$  である。

(b) rank を次のように定める。

$$\text{rank} : K(X) \rightarrow \mathbb{Z}, C := \sum_i n_i \gamma(\mathcal{F}_i) \mapsto \sum_i n_i \dim_K \mathcal{F}_i$$

$C \in \mathfrak{D}$  のとき、 $C$  は  $0 \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{F}'' \rightarrow 0$  を満たす  $\mathcal{F} - \mathcal{F}' - \mathcal{F}''$  で生成される。ここで、 $\mathcal{F}$  は coherent なので、 $\mathcal{F}_\xi$  は有限次元  $\mathcal{O}_\xi = K$  module ( $K$  上 vector space) である。

$0 \rightarrow \mathcal{F}'_\xi \rightarrow \mathcal{F}_\xi \rightarrow \mathcal{F}''_\xi \rightarrow 0$  と  $\dim_K$  が加法的関数であることから、

$$\dim_K \mathcal{F}_\xi - \dim_K \mathcal{F}'_\xi - \dim_K \mathcal{F}''_\xi = 0$$

が成り立つ。よって  $\text{rank}(\mathcal{F} - \mathcal{F}' - \mathcal{F}'') = \dim_K \mathcal{F}_\xi - \dim_K \mathcal{F}'_\xi - \dim_K \mathcal{F}''_\xi = 0$  から rank は well-define である。

$\text{rank}\mathcal{O}_X = \dim_K \mathcal{O}_\xi = \dim_K K = 1$  より、rank は全射となる。

(c) Open immersion  $i : U = X - Y \hookrightarrow X$ 、closed immersion  $\iota : Y \hookrightarrow X$  とするとき、次の exact 系列が存在することを示す。

$$K(Y) \xrightarrow{\mu} K(X) \xrightarrow{\nu} (X - Y) \rightarrow 0 \quad (\text{exact})$$

まず coherent  $\mathcal{O}_Y$ -module  $\mathcal{F}$  に対し  $\iota$  が proper なので  $\mathcal{O}_X$ -module  $\iota_*\mathcal{F}$  も coherent であり (Caution 5.8.1)

$$\mu : K(Y) \rightarrow K(X), \gamma\mathcal{F} \mapsto \gamma(\iota_*\mathcal{F})$$

が存在する。

一方、 $\mathcal{O}_X$ -module  $\mathcal{G}$  が coherent なら  $\mathcal{O}_U$ -module  $i^*\mathcal{G} = i^{-1}\mathcal{G}$  も coherent であり (Proposition 5.8)

$$\nu : K(X) \rightarrow K(U), \gamma\mathcal{G} \mapsto \gamma(i^*\mathcal{G})$$

が存在する。

逆に  $\mathcal{O}_U$ -module  $\mathcal{H}$  に対し、 $\mathcal{O}_X$ -module  $\mathcal{H}'$  が存在して  $i^*\mathcal{H}' = i^{-1}\mathcal{H}' = \mathcal{H}'|_U = \mathcal{H}$  を満たすので (Exercise II.5.15)、 $\nu$  は全射である。

$P \in U$  に対し

$$(i^*\iota_*\mathcal{F})_P = (\iota_*\mathcal{F})_P = \lim_{P \in V} \mathcal{F}(Y \cap V) = \mathcal{F}(\emptyset) = 0$$

となることから  $\text{im } \mu \subseteq \ker \nu$  である。

$\gamma\mathcal{G} \in \ker \nu$  に対し  $\gamma(i^*\mathcal{G}) = 0$  とする。すると、式 (18) より

$$i^*\mathcal{G} = \mathcal{G}|_U = 0 \Rightarrow \text{Supp } \mathcal{G} \subseteq Y \quad (19)$$

となる。

Exercise II.1.18 で示したように、 $\alpha: \mathcal{G} \rightarrow \iota_*\iota^{-1}\mathcal{G}$  が存在するが、これは全射である。

( $\cdot$ )  $V \subseteq X$  に対し、 $\iota^{-1}V = Y \cap V = \text{Spec } A/I$  であり、 $\mathcal{G}|_V = M^\sim$ 、 $\bar{\iota} = \iota|_{\iota^{-1}V}$  とすると、Exercise II.5.1 の解答中の性質 4 と Proposition 5.2 から

$$(\iota_*\iota^{-1}\mathcal{G})|_V = \bar{\iota}_*\bar{\iota}^*(\mathcal{G}|_V) = \bar{\iota}_*((M \otimes_A A/I)^\sim) =_A (M/IM)^\sim$$

となる ([1], Exercise 2.2)。Corollary 5.5 と Proposition 5.6 より

$$\begin{aligned} 0 &\rightarrow IM \rightarrow M \rightarrow M/IM \rightarrow 0 \\ &\Leftrightarrow 0 \rightarrow \widetilde{IM} \rightarrow \widetilde{M} \xrightarrow{\alpha|_V} \widetilde{M/IM} \rightarrow 0 \end{aligned}$$

ここで  $\ker \alpha|_V = \widetilde{IM}$  である。

$M \rightarrow M/IM$  の全射性から  $\widetilde{M} \xrightarrow{\alpha|_V} \widetilde{M/IM}$  は全射、よって  $\mathcal{G}|_V \rightarrow (\iota_*\iota^{-1}\mathcal{G})|_V$  も全射となる。全射性は局所的性質なので  $\mathcal{G} \rightarrow \iota_*\iota^{-1}\mathcal{G}$  は全射となる<sup>13</sup>。(  $\cdot$ : 終)

ここで  $\mathcal{G}_0 = \mathcal{G}$ 、 $\mathcal{G}_1 = \ker \alpha$  とおくと、 $\mathcal{G}_0 \supseteq \mathcal{G}_1$  であり、 $\gamma(\iota^*\mathcal{G}_0) \in K(Y)$  なので  $\iota^*\mathcal{G}_0$  は  $\mathcal{O}_Y$ -module、 $\gamma(\iota^*\mathcal{G}_0) \in \text{im } \mu$  である。

以下、 $\mathcal{G}_1 \rightarrow \iota_*\iota^*\mathcal{G}_1$  に対して同じことを繰り返していくと、

$$\mathcal{G} = \mathcal{G}_0 \supseteq \mathcal{G}_1 \supseteq \mathcal{G}_2 \cdots$$

$$\mathcal{G}_j/\mathcal{G}_{j+1} \in \text{im } \mu$$

$$\mathcal{G}_j|_V = (I^j M)^\sim$$

となる。

このとき、ある  $n \geq 0$  に対し、 $\mathcal{G}_n = 0$  となることを示す。そのためには、十分大きな  $n$  に対して  $I^n M = 0$  を示せば

$$\iota_*\iota^*\mathcal{G}_{n-1}|_V = (I^{n-1}M/I^n M)^\sim = (I^{n-1}M)^\sim = \mathcal{G}_{n-1}|_V$$

より

$$\mathcal{G}_n|_V = \ker(\mathcal{G}_{n-1}|_V \rightarrow \bar{\iota}_*\bar{\iota}^*\mathcal{G}_{n-1}|_V) = \ker(\mathcal{G}_{n-1}|_V \rightarrow \mathcal{G}_{n-1}|_V) = 0$$

<sup>13</sup> $\iota^{-1}V = \emptyset$  のときは  $I = A$  であり、排除する必要はない。

となり、 $X$  は有限の  $V$  でカバーされるので、十分大きな  $n$  を取れば  $\mathcal{G}_n = 0$  を得る。

$$I^n M = 0 \Leftrightarrow I^n \subseteq \text{Ann } M \stackrel{*}{\Leftrightarrow} I \subseteq \sqrt{\text{Ann } M} \Leftrightarrow V(I) \supseteq V(\text{Ann } M)$$

であるが、最後の条件は Exercise II.5.6(b) より  $V(\text{Ann } M) = V(\text{Supp } \mathcal{G}|_V) \subseteq V \cap Y = V(I)$  ゆえ成立している (式 (19))。なお、 $\stackrel{*}{\Leftrightarrow}$  は  $A$  がネーター環ゆえ  $I$  が有限生成であることによる。

さて、 $0 \rightarrow \mathcal{G}_{j+1} \rightarrow \mathcal{G}_j \rightarrow \mathcal{G}_j/\mathcal{G}_{j+1} \rightarrow 0$  から  $\gamma(\mathcal{G}_j) = \gamma(\mathcal{G}_{j+1}) + \gamma(\mathcal{G}_j/\mathcal{G}_{j+1})$  なので

$$\gamma(\mathcal{G}) = \sum_{0 \leq j \leq n-1} \gamma(\mathcal{G}_j/\mathcal{G}_{j+1})$$

であり、 $\mathcal{G}_j/\mathcal{G}_{j+1} \in \text{im } \mu$  から  $\gamma(\mathcal{G}) \in \text{im } \mu$  を得る。以上により

$$K(Y) \rightarrow K(X) \rightarrow (X - Y) \rightarrow 0 \quad (\text{exact})$$

が成り立つ。

### 2.6.11

(a)  $D = \sum_i n_i P_i$  が effective のとき、対応する subscheme of codimension 1 を

$$(Y, \mathcal{O}_D), \quad Y = \{P_i\}_i, \quad \mathcal{O}_D := \mathcal{O}_Y = \mathcal{O}_X/\mathcal{I}_Y \stackrel{\text{Prop.6.18}}{=} \mathcal{O}_X/\mathcal{L}(-D)$$

とする:

$$0 \rightarrow \mathcal{L}(-D) \rightarrow \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{O}_D \rightarrow 0, \quad \text{exact} \quad (20)$$

Exercise II.5.9 解答中の性質 9 から  $\mathcal{O}_Y = \bigoplus_i \mathcal{O}_{Y, P_i}$  となるが、このとき  $\mathcal{O}_{Y, P_i} = k(P_i)^{n_i}$  が成り立つ。

( $\therefore$ )  $X$  の covering として  $\{U_i\}_i$ ,  $P_i \in U_i, U_i = \text{Spec } A^i$  とできる。 $D$  に対する Cartier Divisor を  $(U_i, f_i)$ ,  $f_i := t_i^{n_i}, t_i \in \mathcal{O}_{P_i}$ : local parameter とする。このとき  $\mathcal{O}_{Y, P_i} = \mathcal{O}_{X, P_i}/\mathcal{L}(-D)_{P_i} = A_{\mathfrak{p}_i}^i/(t_i^{n_i})$  であるが ( $P_i$  と対応する  $A^i$  の prime ideal を  $\mathfrak{p}_i$  とした)、 $A_{\mathfrak{p}_i}^i/(t_i)^{n_i} = \widehat{A_{\mathfrak{p}_i}^i}/(t_i)^{n_i}$  ([1], Proposition 10.15) であり、 $\dim \widehat{A_{\mathfrak{p}_i}^i} = \dim A_{\mathfrak{p}_i}^i = 1$  なので (Theorem I.5.4.A)、Theorem I.5.5A から

$$\widehat{A_{\mathfrak{p}_i}^i}/(t_i)^{n_i} = k[[t]]/\mathfrak{m}^{n_i} = k^{n_i} = k(P_i)^{n_i}$$

となる。(  $\therefore$  終 )

以上により  $\mathcal{O}_D = \bigoplus_i k(P_i)^{n_i}$  なので、 $\psi(D) = \gamma(\mathcal{O}_D)$  を得る。

Effective divisor  $D_1 \sim D_2$  に対して、 $\mathcal{L}(-D_1) = \mathcal{L}(-D_2)$  より、 $\mathcal{O}_{D_1} = \mathcal{O}_{D_2} \Rightarrow \psi(D_1) = \psi(D_2)$  が成り立つ。

一般の divisor  $D_1 \sim D_2$  に対しては、 $D'_j = D_j + D, j = 1, 2$  が effective となるようなある effective divisor  $D$  をとることができる。よって  $D'_1 \sim D'_2 \Rightarrow \psi(D'_1) = \psi(D'_2)$  であり、 $\psi$  は定義から準同型なので  $\psi(D_1) = \psi(D_2)$  が成り立つ。

従って  $\psi : \text{Cl } X \rightarrow K(X)$  が定義できる。

(b) 後出の Exercise III.6.8 から、coherent  $\mathcal{F}$  は quotient of a locally free sheaf (of finite rank) である。よって locally free scheme  $\mathcal{E}_0$  が存在し、 $\mathcal{E}_0 \rightarrow \mathcal{F}$  は全射となる。

$$0 \rightarrow \mathcal{E}_1 \rightarrow \mathcal{E}_0 \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow 0 \quad \text{exact}$$

ここで  $\mathcal{E}_1 = \ker(\mathcal{E}_0 \rightarrow \mathcal{F})$  は、振れない  $\mathcal{E}_0$  の submodule なので locally free である。

Exercise II.5.16(a) より  $\wedge^{r_i} \mathcal{E}_i$  は rank 1 かつ locally free なので、 $\wedge^{r_i} \mathcal{E}_i \in \text{Pic } X$ ,  $\det \mathcal{F} = \wedge^{r_0} \mathcal{E}_0 \otimes (\wedge^{r_1} \mathcal{E}_1)^{-1} \in \text{Pic } X$  である。

さて

$$0 \rightarrow \mathcal{E}_1 \rightarrow \mathcal{E}_0 \xrightarrow{\alpha} \mathcal{F} \rightarrow 0 : \text{exact}, \quad 0 \rightarrow \mathcal{E}'_1 \rightarrow \mathcal{E}'_0 \xrightarrow{\sigma} \mathcal{F} \rightarrow 0 : \text{exact}$$

のとき

$$\wedge^{r_0} \mathcal{E}_0 \otimes (\wedge^{r_1} \mathcal{E}_1)^{-1} = \wedge^{r'_0} \mathcal{E}'_0 \otimes (\wedge^{r'_1} \mathcal{E}'_1)^{-1}$$

となることを示す。

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \longrightarrow & \mathcal{E}_0 & \longrightarrow & \mathcal{E}_0 \oplus \mathcal{E}'_0 & \longrightarrow & \mathcal{E}'_0 \longrightarrow 0 \\ & & \alpha \downarrow & & \beta \downarrow & & \sigma' \downarrow \\ 0 & \longrightarrow & \mathcal{F} & \longrightarrow & \mathcal{F} & \longrightarrow & 0 \end{array}$$

ここで、 $\beta : (a, a') \mapsto \alpha(a) + \sigma(a')$  と定義すると、 $\alpha(a)$  の部分が全射なので  $\beta$  も全射、上図式は可換、2つの行は exact である。

$\ker \alpha = \mathcal{E}_1$ ,  $\ker \sigma' = \mathcal{E}'_1$  であり、 $\mathcal{E} := \ker \beta$  とすると、snake lemma から

$$0 \rightarrow \mathcal{E}_1 \rightarrow \mathcal{E} \rightarrow \mathcal{E}'_0 \rightarrow \text{coker } \alpha = 0 : \text{exact}$$

が得られる。よって

$$\det \mathcal{E}'_0 = \det \mathcal{E} \otimes (\det \mathcal{E}_1)^{-1}$$

となる<sup>14</sup>。同様にして

$$\det \mathcal{E}_0 = \det \mathcal{E} \otimes (\det \mathcal{E}'_1)^{-1}$$

も成り立つので、

$$\begin{aligned} \det \mathcal{E} &= \det \mathcal{E}'_0 \otimes \det \mathcal{E}_1 = \det \mathcal{E}_0 \otimes \det \mathcal{E}'_1 \\ &\Rightarrow \det \mathcal{E}_0 \otimes (\det \mathcal{E}_1)^{-1} = \det \mathcal{E}'_0 \otimes (\det \mathcal{E}'_1)^{-1} \end{aligned}$$

を得る。

---

<sup>14</sup> $0 \rightarrow 0 \rightarrow \mathcal{E} \rightarrow \mathcal{E} \rightarrow 0 \Rightarrow \det \mathcal{E} = \wedge^r \mathcal{E} \otimes \wedge^0 0 = \wedge^r \mathcal{E}$

次に

$$0 \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{F}'' \rightarrow 0 : \text{exact} \Rightarrow \det \mathcal{F} = \det \mathcal{F}' \otimes \det \mathcal{F}'' \quad (21)$$

となることを示す。

$$0 \rightarrow \mathcal{E}_1 \rightarrow \mathcal{E}_0 \xrightarrow{\alpha} \mathcal{F} \rightarrow 0 : \text{exact}$$

とする。

これをもとに下図式を作成する。 $\mathcal{E}'_0 = \alpha^{-1}(\mathcal{F}')$  とすると<sup>15</sup>、 $\mathcal{F}' \hookrightarrow \mathcal{F}$  より、 $\mathcal{E}'_0 \hookrightarrow \mathcal{E}_0$  は単射であり、 $\alpha$  が全射ゆえ  $\beta = \alpha|_{\mathcal{E}'_0} : \mathcal{E}'_0 \rightarrow \mathcal{F}'$  も全射である。また、この部分の可換性は明らかである。

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \longrightarrow & \mathcal{E}'_0 & \longrightarrow & \mathcal{E}_0 & \longrightarrow & \mathcal{E}''_0 \longrightarrow 0 \\ & & \beta \downarrow & & \alpha \downarrow & & \delta \downarrow \\ 0 & \longrightarrow & \mathcal{F}' & \xrightarrow{\mu} & \mathcal{F} & \xrightarrow{\nu} & \mathcal{F}'' \longrightarrow 0 \end{array}$$

$\mathcal{E}''_0 = \mathcal{E}_0/\mathcal{E}'_0$  とすると  $\delta : \mathcal{E}_0/\mathcal{E}'_0 \rightarrow \mathcal{F}/\mathcal{F}'$  が自然に定義できる。また  $\alpha, \nu$  とも全射なので、 $\delta$  も全射であり、この部分も可換である。

snake lemma より

$$0 \rightarrow \mathcal{E}'_1 := \ker \beta \rightarrow \mathcal{E}_1 \rightarrow \mathcal{E}''_1 := \ker \delta \rightarrow 0$$

が得られる。また、

$$0 \rightarrow \mathcal{E}'_0 \rightarrow \mathcal{E}_0 \rightarrow \mathcal{E}''_0 \rightarrow 0$$

$$0 \rightarrow \mathcal{E}'_1 := \ker \beta \rightarrow \mathcal{E}'_0 \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow 0$$

$$0 \rightarrow \mathcal{E}''_1 := \ker \delta \rightarrow \mathcal{E}''_0 \rightarrow \mathcal{F}'' \rightarrow 0$$

が成り立つ。

よって

$$\det \mathcal{E}_1 = \det \mathcal{E}'_1 \otimes \det \mathcal{E}''_1$$

$$\det \mathcal{E}_0 = \det \mathcal{E}'_0 \otimes \det \mathcal{E}''_0$$

$$\det \mathcal{F} = \det \mathcal{E}_0 \otimes (\det \mathcal{E}_1)^{-1}$$

$$\det \mathcal{F}' = \det \mathcal{E}'_0 \otimes (\det \mathcal{E}'_1)^{-1}$$

$$\det \mathcal{F}'' = \det \mathcal{E}''_0 \otimes (\det \mathcal{E}''_1)^{-1}$$

から

$$\det \mathcal{F}' \otimes \det \mathcal{F}'' = \det \mathcal{F}$$

<sup>15</sup>Sheaf に対して  $\alpha^{-1}(\mathcal{F})$  の定義は明確にはなされていないが、明らかである。



が成立するので

$$\det : K(X) \rightarrow \text{Pic } X, \sum_i n_i \gamma(\mathcal{F}_i) \mapsto \otimes_i (\det \mathcal{F}_i)^{\otimes n_i}$$

が定義できる。

$D$  が effective のとき  $0 \rightarrow \mathcal{L}(-D) \rightarrow \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{O}_D \rightarrow 0$  なので

$$\begin{aligned} \det \psi(D) &= \det \mathcal{O}_D = \det \mathcal{O}_X \otimes (\det \mathcal{L}(-D))^{-1} \\ &= \mathcal{O}_X \otimes (\mathcal{L}(-D))^{-1} = \mathcal{O}_X \otimes \mathcal{L}(D) = \mathcal{L}(D) \end{aligned}$$

となる<sup>16</sup>。

一般の  $D$  に対しては、 $D = D_+ - D_-$  とすると、 $\psi, \det$  の準同型性から

$$\begin{aligned} \det(\psi(D)) &= \det(\psi(D_+) - \psi(D_-)) = \det \psi(D_+) \otimes (\det \psi(D_-))^{-1} \\ &= \mathcal{L}(D_+) \otimes (\mathcal{L}(D_-))^{-1} = \mathcal{L}(D_+ - D_-) \\ &= \mathcal{L}(D) \end{aligned}$$

が成り立つ。

(c) まず、 $\mathcal{L}(\exists D)^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}$  を証明する。

(証明)  $X$  の生成元  $\eta$  とすると、 $r := \text{rank } \mathcal{F}$  より  $\mathcal{F}_\eta = \mathcal{O}_\eta^{\oplus r}$  であり、Exercise II.5.7(a) から

$$\mathcal{O}_U^{\oplus r} \xrightarrow{\sim} \mathcal{F}|_U, \eta \in U, \exists U \subsetneq X$$

となる。

$X - U$  は有限個の closed point  $\{P_i\}_i$  からなり、対応して Weil divisor  $D = \sum_i P_i$ 、および Cartier divisor を  $(U_i, f_i)$  とする。 $D$  が effective なので対応する Cartier divisor も effective、すなわち  $f_i \in \mathcal{O}(U_i)$  である (Definition, p.145)。

ここに  $(U, 1)$  を追加し、 $U_i$  を縮小して  $P_i$  を含み他の  $P_j$  を含まないようにできる。例えば  $U_i$  が  $P_j$  を含む場合は、 $U_i \cap P_j^c$  とすればよい。また、 $U'_i$  が affine となるように縮小できる。

このようにしても  $(U'_i, f'_i), (U, 1), f'_i = f_i|_{U'_i}$  は Cartier divisor である。

( $\because$ )  $X = \bigcup_i U'_i \cup U$  であり、元々  $f_i/f_j \in \mathcal{O}^*(U_i \cap U_j)$  だったので、 $f'_i/f'_j \in \mathcal{O}^*(U'_i \cap U'_j)$  である。また、 $\forall x \in U \cap U'_i$  に対し  $v_x(f'_i|_{U \cap U'_i}) = 0$  ゆえ、次の性質 10 から  $f'_i|_{U \cap U'_i}/1 = f'_i|_{U \cap U'_i} \in \mathcal{O}^*(U \cap U'_i)$  である。(  $\therefore$  終)

$U'_i, f'_i$  を改めて  $U_i, f_i$  とし、 $U_i = \text{Spec } A^i$  とおく。 $f_i$  は  $A^i$  において  $P_i = V(f_i)$  に対応するもので、 $D(f_i) = U \cap U_i \subseteq U$  となる。実際、 $P := \mathfrak{p} \in D(f_i) \subseteq U_i \Leftrightarrow f_i \notin \mathfrak{p} \Leftrightarrow v_P(f_i) = 0 \Leftrightarrow P \neq P_i \Leftrightarrow P \in U_i - P_i = U_i \cap U$  である。

$\mathcal{O}_U^{\oplus r} \xrightarrow{\sim} \mathcal{F}|_U$  より  $\mathcal{F}(U)$  は  $r$ -tuple section  $\oplus_{1 \leq j \leq r} t_j$  から成る。すると、 $t'_j := t_j|_{D(f_i)} \in \mathcal{F}(D(f_i))$  から  $f_i^{n_{ij}} t'_j \in \mathcal{F}(U_i)$  に拡張でき (Lemma II.5.3(b))、 $e = \sum_j \max_i n_{ij}$  とすると、 $f_i^e t'_j \in \mathcal{F}(U_i)$  が成り立つ。

$$\mathcal{O}_{U_i}^{\otimes e} f_i^e t'_j \rightarrow \mathcal{F}|_{U_i} \otimes \mathcal{O}_{U_i}^{\otimes e} = \mathcal{F}|_{U_i}$$

<sup>16</sup>  $\mathcal{L}(0) = \mathcal{L}(D - D) = \mathcal{L}(D) \otimes (\mathcal{L}(D))^{-1} = \mathcal{O}_X$ ,  $\mathcal{L}(-D) = \mathcal{L}(0 - D) = \mathcal{L}(0) \otimes (\mathcal{L}(D))^{-1} = (\mathcal{L}(D))^{-1}$ 。また  $\mathcal{L}$  が invertible のとき  $\det \mathcal{L} = \wedge^1 \mathcal{L} = \mathcal{L}$ 。

$$\Rightarrow (\mathcal{L}(-D)|_{U_i})^{\otimes e} t'_j = \mathcal{L}(-eD)|_{U_i} t'_j \rightarrow \mathcal{F}|_{U_i}$$

$j$  について合わせると

$$\mathcal{L}(-eD)|_{U_i}^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}|_{U_i}$$

を得る。

$U$  に関しては既に  $\mathcal{L}(-eD)|_U^{\oplus r} = \mathcal{O}_U^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}|_U$  が成立していたので、よって  $\mathcal{L}(-eD)^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}$  であり、 $eD$  を改めて  $D$  とおけば、 $D$  は effective で

$$\mathcal{L}(-D)^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}$$

となる。(証明終)

次に、 $\mathcal{L}(-D)^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}$  が単射であることを示す。

( $\because$ )  $\varphi : \mathcal{O}_X^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F} \otimes \mathcal{L}(D)$  が成り立つが、この  $\ker \varphi$  は捩れない local free module の submodule なのでやはり locally free module である。

$l = \text{rank } \ker \varphi$  として  $\mathcal{O}_X^{\oplus r} / \ker \varphi = \mathcal{F} \otimes \mathcal{L}(D)$  の generic point  $\eta$  での stalk をとると

$$\mathcal{O}_\eta^{\oplus r} / (\ker \varphi)_\eta = \mathcal{F}_\eta \otimes \mathcal{L}(D)_\eta$$

$$\Rightarrow k^r / k^l = k^r \otimes_k k = k^r \Rightarrow l = 0$$

よって  $\ker \varphi = 0$  となり、 $\varphi : \mathcal{O}_X^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F} \otimes \mathcal{L}(D)$  は単射である。locally free module は flat なので (性質 11)、 $\mathcal{L}(-D)^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}$  は単射である。(  $\because$  終)

$\mathcal{L}(-D)^{\oplus r} \hookrightarrow \mathcal{F}$  から

$$0 \rightarrow \mathcal{L}(-D)^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{T} \rightarrow 0 : \text{exact, } \mathcal{T} = \mathcal{F} / \mathcal{L}(-D)^{\oplus r} \quad (22)$$

が得られる。ここで、

$$\text{rank } \mathcal{T} = \dim_K \mathcal{T}_\eta = \dim_K (\mathcal{F}_\eta / \mathcal{L}(-D)_\eta^{\oplus r}) = r - r = 0$$

である。

$D$  の effective 性からの  $\psi(D) = \gamma(\mathcal{O}_D)$ 、式 (22) からの  $\gamma(\mathcal{F}) = r\gamma(\mathcal{L}(-D)) + \gamma(\mathcal{T})$ 、式 (20) からの  $\gamma(\mathcal{O}_X) = \gamma(\mathcal{L}(-D)) + \gamma(\mathcal{O}_D)$  を用いると

$$\begin{aligned} \gamma(\mathcal{F}) - r\gamma(\mathcal{O}_X) &= r\gamma(\mathcal{L}(-D)) + \gamma(\mathcal{T}) - r\gamma(\mathcal{O}_X) \\ &= r(\gamma(\mathcal{L}(-D)) - \gamma(\mathcal{O}_X)) + \gamma(\mathcal{T}) = -r(\gamma(\mathcal{O}_D)) + \gamma(\mathcal{T}) \\ &= -r\psi(D) + \gamma(\mathcal{T}) \end{aligned}$$

を得る。この中で第 1 項は明らかに  $r\psi(D) \in \text{im } \psi$  であるが、第 2 項  $\gamma(\mathcal{T})$  も次に示すように  $\text{im } \psi$  に属す。

( $\because$ )  $\eta \notin \text{Supp } \mathcal{F}$  ゆえ  $\text{Supp } \mathcal{F} \subsetneq X$  であり ( $\text{Supp } \mathcal{F}$  は閉集合、Exercise II.5.6)、 $\mathcal{L}(-D)$  は coherent なので coker である  $\mathcal{F}$  も coherent、よって Exercise II.6.9 の解答中の性質 9 より  $\mathcal{F} = \bigoplus_{P \in \text{Supp } \mathcal{F}} i_P(I_P)$  となり、 $P \in U_i$  に対し

$$I_P = \mathcal{F}_P = \mathcal{F}_P / \mathcal{L}(-D)_P^r = \mathcal{O}_P^r / \mathcal{L}(-D)_P^r = (\mathcal{O}_D)_P^r$$

である。 $(\mathcal{O}_D)_P$  は (a) で示したように  $k(P)^{n_P}$  に等しいので、 $\gamma(\mathcal{F}) \in \text{im } \psi$  となる。 $(\because \text{終})$

以上により

$$\gamma(\mathcal{F}) - r\gamma(\mathcal{O}_X) \in \text{im } \psi$$

である。

**性質 10.**  $X$  が normal, noetherian, separated のとき、 $v_Y(f) = 0$ ,  $Y \cap U \neq \emptyset$ ,  $f \in K^*$ ,  $\forall Y : \text{prime divisor}$  ならば  $f \in \mathcal{O}^*(U)$

(証明)  $f \in \mathcal{O}(U)$  を示せばよい。なぜなら、もしこれが成立すれば、 $f^{-1} \in K^*$ ,  $v_Y(f^{-1}) = -v_Y(f) = 0$  より  $f^{-1} \in \mathcal{O}^*(U)$  だからである。

$Y = \{\eta\}^-$  とし、 $U = \bigcup_i U_i$ ,  $U_i = \text{Spec } A^i$ ,  $\eta \in U_i$  とする。

$X$  は normal なので、 $A^i$  の任意の prime ideal  $\mathfrak{p}_x$  に対して、 $A_{\mathfrak{p}_x}^i$ : 整閉であり、よって  $A^i$ : normal より  $U_i$  は p. 130 の (\*) を満たす。また  $Y \cap U_i = V(\mathfrak{p}_\eta)$  は  $U_i$  における prime divisor となる。

$v_Y(f) = 0 \Rightarrow v_{Y \cap U_i}(f|_{U_i}) = 0$  より  $f|_{U_i} \in \mathcal{O}_{U_i, \eta} = A_{\mathfrak{p}_\eta}^i$  となるが、 $Y \cap U_i \neq \emptyset$  を満たす  $Y$  の全体は  $A^i$  における  $\mathfrak{p}$ ,  $\text{height}(\mathfrak{p}) = 1$  なる  $\mathfrak{p}$  全体に一致するので

$$f|_{U_i} \in \bigcap_{\text{height}(\mathfrak{p})=1} A_{\mathfrak{p}}^i = A^i = \mathcal{O}(U_i) \Rightarrow f \in \mathcal{O}(U)$$

である。(証明終)

**性質 11.** rank が一定な locally free module は flat である。

(証明)  $r = \text{rank}(\mathcal{E})$  で

$$0 \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{F}'' \rightarrow 0 \text{ exact}$$

とする。すると  $\forall x \in X$  に対し

$$0 \rightarrow \mathcal{F}'_x^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}_x^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F}''_x^{\oplus r} \rightarrow 0 \text{ exact}$$

であり

$$(\mathcal{F} \otimes \mathcal{E})_x = \mathcal{F}_x \otimes \mathcal{O}_x^{\oplus r} = \mathcal{F}_x^{\oplus r}$$

から

$$0 \rightarrow (\mathcal{F}' \otimes \mathcal{E})_x \rightarrow (\mathcal{F} \otimes \mathcal{E})_x \rightarrow (\mathcal{F}'' \otimes \mathcal{E})_x \rightarrow 0 \text{ exact}$$

となるので

$$0 \rightarrow \mathcal{F}' \otimes \mathcal{E} \rightarrow \mathcal{F} \otimes \mathcal{E} \rightarrow \mathcal{F}'' \otimes \mathcal{E} \rightarrow 0 \text{ exact}$$

が得られる。(証明終)

(d) 次の系列が exact で split していることを示す。

$$0 \rightarrow \text{Pic } X = \text{Cl } X \xrightarrow{\psi} K(X) \xrightarrow{\text{rank}} \mathbb{Z} \rightarrow 0 : \text{exact} \quad (23)$$

Effective  $D$  に対して  $\psi(D) = 0$  とすると

$$\gamma(\mathcal{O}_D) = \gamma(\mathcal{O}_X/\mathcal{L}(-D)) = 0 \Rightarrow \gamma(\mathcal{O}_X) - \gamma(\mathcal{L}(-D)) = 0 \Rightarrow \mathcal{O}_X = \mathcal{L}(-D)$$

より得られる  $\mathcal{O}_{U_i} f_i = \mathcal{O}_{U_i}$  から  $f_i$  は unit、従って  $v_P(f_i) = 0 \Rightarrow D = 0$  ゆえ  $\psi$  は単射である。

一般の  $D$  に対しては、 $D = D_+ - D_-$  とすると、 $\psi$  は effective Pic  $X$  に対して単射だったので、 $0 = \psi(D) = \psi(D_+) - \psi(D_-) \Rightarrow D_+ = D_- \Rightarrow D = 0$  より  $\psi$  は単射である。

Effective  $D$  に対して、 $\text{rank } \psi(D) = \text{rank } \gamma(\mathcal{O}_D) = \text{rank}(\gamma(\mathcal{O}_X/\mathcal{L}(-D))) = 0$  であり、一般の  $D$  に対しては、 $\psi, \text{rank}$  は準同型なので、 $D = D_+ - D_-$  とすると、 $\text{rank } \psi(D) = \text{rank } \psi(D_+) - \text{rank } \psi(D_-) = 0 - 0 = 0$ 、よって  $\text{im } \psi \subseteq \ker \text{rank}$  が成り立つ。

一方、 $\text{rank } \mathcal{F} = \dim_K \mathcal{F}_\eta = 0$  とすると、(c) より

$$\text{im } \psi \ni \gamma(\mathcal{F}) - \text{rank } \mathcal{F} \gamma(\mathcal{O}_X) = \gamma(\mathcal{F})$$

となる。よって、 $\text{im } \psi = \ker \text{rank}$  であり、系列 (23) は exact である。

$\phi : \mathbb{Z} \rightarrow K(X)$ ,  $n \mapsto n\gamma(\mathcal{O}_X)$  とすると、 $\text{rank } \phi = \text{id}_{\mathbb{Z}}$  なので、系列 (23) は split している。従って、

$$K(X) = \text{Pic } X \oplus \mathbb{Z}$$

が成立する。

## 2.6.12

Sheaf の deg を次のように定義する。

$$\text{deg} : \text{Coh } X \xrightarrow{\gamma} K(X) \xrightarrow{\det} \text{Pic } X \xrightarrow{\sim} \text{Cl } X \xrightarrow{\text{deg}} \mathbb{Z}$$

この deg は次に示すように (1), (2), (3) を満たす。

(1)  $\mathcal{L}(D)$  に対する deg は

$$\text{deg} : \mathcal{L}(D) \mapsto \gamma(\mathcal{L}(D)) \mapsto \det \mathcal{L}(D) = \mathcal{L}(D) \approx D \mapsto \text{deg } D$$

ゆえ、 $\text{deg } \mathcal{L}(D) = \text{deg } D$  である。

(2)  $\det \mathcal{F} = \mathcal{L}(D)$ ,  $D = \sum_P n_P P$  とすると、

$$\text{deg} : \mathcal{F} \rightarrow \gamma(\mathcal{F}) \rightarrow \det(\mathcal{F}) \approx \mathcal{L}(D) \rightarrow \text{deg } D = \sum_P n_P$$

$$\Rightarrow \deg \mathcal{F} = \sum_P n_P$$

である。

$D$  が effective のとき

$$(\mathcal{O}_D)_\eta = \mathcal{O}_\eta / \mathcal{L}(-D)_\eta = \mathcal{O}_\eta / (\mathcal{O}_\eta f_i) \approx K/K = 0$$

が成り立つ。一般の場合には  $D = D_+ - D_-$  とかけ、 $\psi$  が準同型なので

$$\psi(D)_\eta = \psi(D_+)_\eta - \psi(D_-)_\eta = \gamma(\mathcal{O}_{D_+})_\eta - \gamma(\mathcal{O}_{D_-})_\eta = 0$$

である。また、前問 (b) より

$$\det \mathcal{F} = \mathcal{L}(D) = \det \psi(D)$$

なので、 $\mathcal{F}$ ,  $\psi(D)$  は  $\det$ ,  $\text{rank}$  と一致し、前問 (d) の

$$K(X) \xrightarrow{\sim} \text{Pic } X \oplus \mathbb{Z}, \quad \gamma(\mathcal{F}) \xrightarrow{\sim} (\det \mathcal{F}, \text{rank } \mathcal{F})$$

を用いれば、

$$\mathcal{F} = \psi(D)$$

を得る。このとき、

$$\mathcal{F} = \psi(D) = \sum_{P \in Y} \gamma(k(P)^{\oplus n_P}), \quad Y = \{P | n_P \neq 0\},$$

$k(P)$  は skyscraper ゆえ

$$\mathcal{F}_Q = \begin{cases} k(P)^{\oplus n_P} & : Q = \exists P \in Y \\ 0 & : \text{otherwise} \end{cases}$$

から  $Q \in \text{Supp } \mathcal{F} \Leftrightarrow Q = \exists P \in Y$ 、すなわち  $Y = \text{Supp } \mathcal{F}$  である。  
すると、

$$\mathcal{F}_P = (\psi(D))_P = k(P)^{\oplus n_P}$$

$$\Rightarrow \text{length } \mathcal{F}_P = \text{length } k(P)^{\oplus n_P} = \dim_k k(P)^{\oplus n_P} = n_P$$

ゆえ、

$$\deg \mathcal{F} = \sum_P n_P = \sum_P \text{length } \mathcal{F}_P$$

が成り立つ。

(3) 完全系列

$$0 \rightarrow \mathcal{F}' \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{F}'' \rightarrow 0 : \text{ exact}$$

に対して、式 (21) から  $\det \mathcal{F} = \det \mathcal{F}' \otimes \det \mathcal{F}''$  が成り立つが、 $\det \mathcal{F} = \mathcal{L}(D)$  等とすると

$$\begin{aligned} \mathcal{L}(D) &= \mathcal{L}(D') \otimes \mathcal{L}(D'') = \mathcal{L}(D' + D'') \\ \Rightarrow D &= D' + D'' \Rightarrow \deg(D) = \deg(D') + \deg(D'') \\ \Rightarrow \deg \mathcal{F} &= \deg \mathcal{F}' + \deg \mathcal{F}'' \end{aligned}$$

従って、 $\deg$  は準同型である。

(1)~(3) を満たす  $\deg : \text{Coh } X \rightarrow \mathbb{Z}$  の一意性について。

(1), (2) により  $\deg \mathcal{L}(D)$ ,  $\deg(T)$ ,  $T : \text{torsion sheaf}$  については一意的に決まる。式 (22) の

$$0 \rightarrow \mathcal{L}(D)^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{T} \rightarrow 0 : \text{exact}$$

と (3) より

$$\deg \mathcal{F} = r \deg \mathcal{L}(D) + \deg \mathcal{T}$$

が成り立つので<sup>17</sup>、 $\deg \mathcal{F}$  も一意的に決まる。

## References

- [1] M. F. Atiyah and I. G. MacDonald: Introduction to Commutative Algebra, Addison-Wesley, 1963
- [2] 河田敬義: ホモロジー代数 I, 岩波, 1976
- [3] Lawrence Washington: Elliptic Curves, Chapman & Hall/CRC, 2003
- [4] 松坂和夫: 代数系入門, 岩波, 1976

---

<sup>17</sup> $0 \rightarrow \mathcal{G}^{\oplus(r-1)} \rightarrow \mathcal{G}^{\oplus r} \rightarrow \mathcal{G} \rightarrow 0 : \text{exact} \Rightarrow \gamma(\mathcal{G}^{\oplus r}) = \gamma(\mathcal{G}^{\oplus(r-1)}) + \gamma(\mathcal{G}) \Rightarrow \deg \mathcal{G}^{\oplus r} = r \deg \mathcal{G}$